研　究　紀　要

水　脈

―ＭＩＮＡＭＩ－

令和４・５年度

自立活動、各教科等を合わせた指導における個に応じた効果的な指導と評価の在り方

第　２１　号

栃木県立南那須特別支援学校

巻　頭　言

～希望の鐘よ　なりひびけ～

校長　諏訪　晴彦

『那珂川・荒川の清流が南那須の里を潤し、美しい景観を織りなし、人々の豊かな心情を育んでいる。その源は那須・塩原の奥深く、岩陰から滲み出し、渓谷を迸り、やがて滔々たる流れを作り、末は淀みながら太平洋に注いでいる。しかし、水はすべて川を作るとは限らない。蛇尾川（那珂川の支流）のように伏流しているものもあるし、多くは滲透して地下に水脈を作っているものと思う。地下の水脈はどのように分布し、どのように移動しているのか、全く見当がつかない。（原文ママ）』とは、本誌「水脈」創刊号における、本校二代校長　田代芳男先生の「創刊のことば」の冒頭部分です。

田代校長先生は、次のようにも書かれています。『私は、本誌を「水脈」と名付けた。精神薄弱児教育は地下の水脈を求めて掘削するようなもので、掘れども掘れども水の出ない虚しさを感ずることも多いが、ある日突然湧水して欣喜雀躍することもある。一人ひとりの研究を集大成して地下水脈の全容が明らかになるよう願ってやまない。なお、南那須養護学校ならではのユニークな研究誌として発展することを祈って、「水脈」を「みなみ」と呼ぶことにしたい。（原文ママ）』今年度、創立４１年目を迎えた本校の黎明期の取組が熱量をもって伝わってきます。また、現在は、特別支援教育に名称を変えていることもそうですが、諸先輩方の研究の成果が実践の中で脈々と培われており、現在の研究は、地下水脈まで掘削が進み、地下の様子や水質も調査し、『ある日突然湧水して』ではなく、自然湧出泉のように噴き上げている状態ではないかと感じています。

現在における日々の教育は、南那須特別支援学校の諸先輩方が築き上げてきたとおりに、根気強く、丁寧に、チームワークを生かして実践されています。特に、児童生徒の皆さんが成長する姿を共有できることが、最大の教師冥利に尽きることと感じています。ただし、『地下水脈の全容が明らかになる』までには、今後さらなる研究の推進を図っていく使命も強く感じています。

結びに、研究を進めていただいた先生方、執筆、編集や発行に携わっていただいた先生方、これまで関わる中でお力添えいただいた皆々様に敬意を表するとともに感謝申し上げます。自然湧出泉が豊かで疲れを癒す良質な温泉となり、皆様方と分かち合える日が来ることを願ってやみません。

＜　目　　次　＞

巻頭言

Ⅰ　はじめに　･･･　1

Ⅱ　小学部　･･･　3
「自立活動の指導における子どもの主体的な取組を促す効果的な指導と評価の在り方～自立活動における指導目標・指導内容設定シートを活用した個別の指導計画と評価の工夫、自立活動に関するねらいと指導内容の整理～」

Ⅲ　中学部　･･･１３
「授業において、生徒自身が何を学び、何ができるようになったかが分かる自己評価シートの作成と授業改善」

Ⅳ　高等部　･･･２６
「社会的・職業的自立に向けて、課題を解決する力の育成につながる、個に応じた学習の振り返りの仕方や評価方法についての検討」

Ⅴ　研究のまとめ　･･･３６

編集後記

Ⅰ　はじめに

１　研究主題「自立活動、各教科等を合わせた指導における個に応じた効果的な指導と評価の在り方」

２　研究の概要

平成３１年度（令和元年度）から令和３年度にかけては、新学習指導要領の目標に沿った内容の効果的な指導を目指した研究を行った。主に、年間指導計画や単元指導計画の見直しを行い、育成を目指す資質・能力の三つの柱に基づいた目標や内容を明確にし、書式の統一を図ることができた。

この成果を踏まえ、令和４、５年度は、各学部で自立活動や各教科等を合わせた指導において重点的に取り組む学習を選定し、研究授業や授業研究会を実施することとした。目標や内容についての検討、児童生徒の学習への取り組みの様子からの評価、という PDCA サイクルに基づく改善をさらに進めた。

特に、新学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、個々の発達段階や特性に応じた評価について重きを置いた。

本研究は、栃木県特別支援学校教育課程研究集会の研究主題と関連付けている。このことで、県全体の動向や他校の好事例を参考にすることができ、より良い改善、実践につながるものと考える。

３　研究方法

学校課題推進委員会を中心に全体の役割分担、研究計画、方向性の周知、進捗状況の把握や連絡調整を行った。【図１】

委員会は年３～４回程度設定し、実際の研究は学部ごとのテーマに沿って進めた。【資料１】

学校課題推進委員会

◎主幹教諭、〇学習指導部長、教務主任、各学部主事、研修係、教科等指導係、自立活動係

実施計画の立案、実施、進行管理、連絡調整

研修係	教科等指導係・自立活動係
・研修日の調整 ・研究授業担当教員の調整 ・授業研究会の運営・記録 ・報告会の企画、運営 ・紀要原稿とりまとめ、校正、製本	・学部内の研修計画、運営 ・中間報告、研究集会参加 ・紀要の立案

各学部主事
各学部の研修に関する助言・授業改善・学部内の情報共有

【図１　組織及び役割分担】

各学部のテーマと内容
（１）小学部
①　自立活動における指導目標、指導内容設定シートを活用した個別の指導計画と評価の工夫
②　自立活動に関するねらいと指導内容の整理
（２）中学部
①　授業において生徒自身が何を学び、何ができるようになったかが分かる自己評価シートの作成と授業改善（令和４年度「生活単元学習」令和５年度「作業学習」）
（３）高等部
①　社会的・職業的自立に向けて、課題を解決する力の育成につながる、個に応じた学習の振り返りの仕方や評価方法についての検討

【資料１　各学部のテーマと内容】

４　研究計画

令和４年度

４／７　（木）	**学校課題推進委員会①** 本年度の流れ、各委員の役割分担、各学部の授業実践等の方法の検討、日程確認
４／２０（水）	職員会議：全職員周知
４／２８（木）	学部会：課題研修についての協議・確認
５／１０（火）	以降学部ごとの研修 学校課題研修日①
６／１４（火）	学校課題研修日②
７／５　（火）	学校課題研修日③
７／１５（金）	**学校課題推進委員会②**
７／２５（月）	**栃木県特別支援学校教育課程研究集会報告** **（B－２、C）**
８／３１（水）	職員会議：全体周知
９／１　（木）	学部会： 進捗状況の把握・共有
１０／２４（月）	学校課題研修日④
１２／６　（火）	学校課題研修日⑤
１／１０（火）	学校課題研修日⑥
２／１６（木）	**学校課題推進委員会③**
３／１０（金）	中間報告会

令和５年度

４／７　（金）	**学校課題推進委員会①** 本年度の流れ、各委員の役割の確認、授業実践等のやり方の確認、年度内の日程確認
４／１９（水）	職員会議：全職員周知
４／２８（金）	学部会：今後の研修について協議・確認
５／１８（木）	以降学部ごとの研修 学校課題研修日①
６／１５（木）	学校課題研修日②
７／４　（火）	学校課題研修日③
７／１３（木）	**学校課題推進委員会②**
７／２０（木）	**栃木県特別支援学校教育課程研究集会報告（A、C）**
８／３０（水）	職員会議：全体周知
９／５　（火）	学校課題研修日④
１０／１２（木）	学校課題研修日⑤
１１／９　（木）	学校課題研修日⑥
１２／１　（金）	**学校課題推進委員会③**
１２／１９（火）	学校課題研修日⑦
１／１１（木）	**研究紀要原稿締め切り**
１～２月中	校正・印刷・発行
３／８　（金）	**学校課題研究報告会**
３月	**関係機関発送・HP 掲載**

Ⅱ　小学部

「自立活動の指導における子どもの主体的な取組を促す効果的な指導と評価の在り方～自立活動における指導目標・指導内容設定シートを活用した個別の指導計画と評価の工夫、自立活動に関するねらいと指導内容の整理～」

１　研究の目的（趣旨）

本校小学部では、令和２～３年度において、全ての教科、合わせた指導の指導計画について、学習指導要領の改訂に基づいた改善を進め、目標を「知識・技能」「思考・判断・表現力」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に分けて明確に記すこととした。自立活動においても、学習指導要領の改訂を踏まえ、個別の指導計画の作成の手順や自立活動の内容を再確認して見直しを行うことが求められるところである。そこで、令和４年度より、栃木県特別支援学校教育課程研究集会において示された自立活動に関する研究主題（「自立活動の指導における子どもの主体的な取組を促す効果的な指導と評価の在り方」）を基に、二つの研究テーマを設定して取り組んでいくことにした。

テーマⅠ「自立活動における指導目標・指導内容設定シートを活用した個別の指導計画と評価の工夫」では、栃木県教育委員会の特別支援学校教育課程編成の手引［小学部・中学部］に基づき、「自立活動における指導目標・指導内容設定シート」（以下、「自立活動シート」）の作成と活用に取り組む。この研究を通じて、各教員が実態把握から指導目標を設定する過程において中心的な課題を導き出す手続きを理解し、実態把握に必要な情報や指導目標、具体的な指導内容、指導経過などの記入を円滑に進められるようにするとともに、教員同士の情報共有や話し合いの際に役立てていくことでＰＤＣＡサイクルの実践につなげていきたい。また、自立活動の指導と各教科との関連性を確認しながら、学級ごとに実態と目標を複数の指導者で共有し、目標を意識した授業計画や実践を進めるとともに、実践事例を取り上げて事例検討会を実施し、効果的な指導の在り方について検討していく。

テーマⅡ「自立活動に関するねらいと指導内容の整理」では、本校小学部独自の指導内容表の作成に向けて、自立活動の６区分２７項目に基づいた指導内容（ねらい・指導目標、学習内容、具体例・教材等）を集約していく。この取り組みを通じて、小学部の教員が他の学級の授業計画や実践を見ることが少なく、学級ごとに集団と個別での指導計画を検討する上で大変苦慮しているという現状を改善できるようにしていくとともに、小学部全体で自立活動に関する指導の充実を図っていきたい。

２　研究計画

（１）テーマⅠ　①小学部における自立活動に関する研修
②各学級における「自立活動シート」の作成及び指導の実践と振り返り
③自立活動に関する事例研究

（２）テーマⅡ　①「自立活動指導内容一覧表」の作成
②「自立活動指導内容一覧表」に関するアンケートの実施

３　実践

（１）テーマⅠ「自立活動における指導目標・指導内容設定シートを活用した個別の指導計画と評価の工夫」

① 小学部における自立活動に関する研修

本校学習指導部自立活動係の担当者が中心となり、栃木県教育委員会の「自立活動シート」の作成方法（令和４年度）や自立活動の特色や指導の進め方（令和５年度）に関する研修を行った。

② 各学級における「自立活動シート」の作成及び指導の実践と振り返り

ア　各学級における「自立活動シート」の作成

令和４年度は、各学級において一名の事例対象者を選定した後、「自立活動シート」の作成に取り組んだ。児童の実態については、個別の教育支援計画を参照しながら記入を進めるとともに、本人の願い、３年後の目指す姿など、近い将来の姿を保護者懇談などでの話し合いを基に確認した。指導目標については、個別の教育支援計画の自立活動の目標とリンクさせながら設定した。指導内容については、いつどこで何をするのかがイメージできるように指導の場面や方法を具体的に記入するとともに、重視した配慮点に関する確認も行うようにした。

なお、「自立活動シート」の作成に際しては、担任及び副担任を中心に、同じ学習グループの教員の意見も交えて、複数の教員間で検討を行った。

イ　各学級の実践における「自立活動シート」の活用

各学級では、事例対象者の実践を前期と後期に分けて進めた。各事例における指導目標の一部については、表１のとおりである。なお、指導の経過については、自立活動充実研修で提示された「自立活動シート」の様式（表２）を基に前期（４月～９月）と後期（１０月～３月）に分けて記入することとした。また、自立活動と各教科のつながりを確認するため、指導の経過の各教科との関連の欄には、各教科の学習指導要領解説より関連する内容を抜き出して記入を行った。

ウ　実践後のアンケートの実施と回答状況

実践後のアンケートより、「自立活動シート」については「記入しやすかった」という回答が多かったものの、観点（関連性、適時性等）に着目して課題を整理することや、自立活動における指導と各教科との関連を検討することに対して「難しかった」という意見が一部寄せられた。また、「自立活動シート」の作成と活用に対しては、実務的な負担感はあるものの、「指導目標と目標達成のための手立てが明確になった」「より良い指導を考える機会となった」などの肯定的な意見が多かった。さらに、「じっくりと児童の実態把握と指導・支援方法などを話し合うことができてよかった」「共通理解が図られたとともに他の視点から意見を聞けたことはありがたかった」などの感想があり、今回の実践に複数の教員で連携しながら取り組めたことが分かった。

表１　各事例における指導目標（小低ブロック）

学級	指導目標
１－１	教師とゲームや遊びをしながら、語彙や表現を増やすことができる。
１－２	遊びたいおもちゃを写真カードで選ぶことができる。
１－３	身近によく使う語彙を習得し、他者に伝えることができる。
２－１	単語を一音ずつ意識して話したり、身振り手振りのコミュニケーションを増やしたりすることができる。
３－１	３～４の選択肢の中から「～がやりたいです」と伝えることができる。
３－２	「いる」「いらない」「行く」「行かない」など二択で意思を伝えることができる。

表２「自立活動における指導目標・指導内容設定シート」の一部

短期目標	呼びかけに対して適切な返事をしたり、決められた活動の終了後に丁寧な言葉で報告したりすることができる。
指導の状況	
前期 ４月～ ９月	【日常的な場面】・話し掛ける際には、名前を呼んで自分に話し掛けられていることが分かるようにしたり、終了後は必ず報告するように促したりするようにした。また、日頃から丁寧な言葉遣いを奨励して身に付けられるようにした。 【朝の課題学習・自立活動等】・決められた課題等が終わったら、すぐ教員を呼んで報告をすることを促し、徹底した。 【国語】・正しい平仮名表記や挨拶の言葉、はっきりとした発音の習得などを目指した課題（プリントや音読等）を設定して取り組めるようにした。
各教科との関連	生活：(３段階)身近な人と自分の関わりが分かり、一人で簡単な応対などをしようとすること。国語：(２段階)身近な人の話し掛けや会話などの話し言葉に慣れ、言葉が気持ちや要求を表していることを感じること。(２段階)挨拶をしたり、簡単な台詞などを表現したりすること。(２段階)身近な人との会話を通して、物の名前や動作など、いろいろな言葉の種類に触れること。
評価・改善	・話している途中の応答が「うんうんうん」と言ってしまうこともあるが、返事は「はい」と一回で言うことが分かり、自分で言い直すようになってきた。活動終了後、「〇〇先生できました。」と丁寧に報告できることが増えてきた。 ・活動や説明などに集中できていないと、挨拶や次の手順ができなくなってしまうことがあるため、取り組むべき時間内は落ち着いて集中を保てるよう、環境設定や関わり方を工夫する必要がある。

③　自立活動に関する事例研究

令和４年度は、教職３年目の教員の実践を取り上げて事例検討会を実施した。事例検討会では、「自立活動シート」を活用しながら児童の実態や中心的な課題、指導目標などの確認を行い、実際の指導場面の映像を視聴しながら指導内容や支援の方向性、改善策等を話し合った。なお、この検討会は、自立活動指導充実事業の校内研修を兼ねて実施され、併せて外部専門家（言語聴覚士）による助言、講義等も行われた。

令和５年度は、各教員の希望を取り、二つのグループに分かれて、それぞれ２年目研修の教員の実践に関する事例検討会を実施した。事例検討会では、実際の指導場面の映像を視聴しながら意見交換を行った。初回の事例検討会については、話し合いを通じて「自立活動シート」の作成に取り組むこととし、項目に従って、実態把握と中心的な課題の整理から行い、指導目標の設定と目標達成のために必要な項目を選定し、具体的な指導内容の検討を進めた。

写真１　　実践事例イ

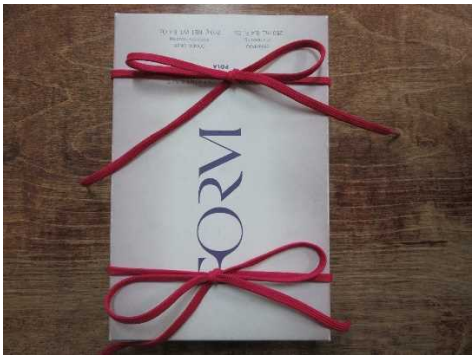


写真２　　実践事例ウ

ア　実践事例（小学部２年　男子）

（ア）中心的な課題

中心的な課題	・構音の発達を促しながら、言葉以外のコミュニケーション方法と併せて、自分の伝えたいことが正しく伝わる経験を増やしていくこと。

（イ）指導目標の設定

長期目標	・言葉による簡単な会話の中で、身振り手振りを交えて、正確に自分の伝えたいことを伝えることができる。
短期目標	・単語を一音ずつ意識して話したり、身振り手振りのコミュニケーションを増やしたりすることができる。

（ウ）指導の状況（指導場面、指導内容と手立てを含む）

４～７月	○絵本の読み聞かせ：教師と１対１で絵本の読み聞かせをした。 ○舌の体操をする：好きな昆虫のイラストの口が丸くくり抜かれた部分から舌に見立てた赤い指サックを教師が動かし、それをまねながら、舌の動きを意識する学習を行った。 ○動物当てクイズをする：動物カードから相手に見えないようにクイズにするカードを一枚選び、大きさや鳴き声などの特徴を言葉などで伝え、相手は得られたヒントから答えの動物を当てるという学習を行った。　【自立活動、国語】

＜事例検討会での検証（９月）＞

【児童の変容】

・読み聞かせで登場人物の動きを教師と一緒に模倣したり、自ら登場人物の動きを身振り手振りで表現したりすることができた。

【考察】

・「ぶどう」を「ぶぼー」など、発音の誤り方に一貫性はないが、文字による表記がしてあると正しく読んだり、言い直しをすると直せたりすることから、音韻意識を高める学習を取り入れていく。

９～１２月	【自立活動、日常生活の指導】 ※舌の体操、動物当てクイズ、平仮名の短い単語を読む学習は継続して行った。 ○イラストを見て、平仮名カードでイラストの名前を作る：イラストを見て、そのイラストの名前を平仮名のカードで並べるようにした。

＜事例検討会での検証（１２月）＞

【児童の変容】

　イラストを見て平仮名カードで名前を作るときには「ほし」を「ほち」などと本児の発音のまま、カードを並べることがあった。似ている音の聞き分けが不十分なことから、文字を見せながら正しい音を選ぶように促すと、正しい音を選ぶことができるようになってきた。

【考察】

・平仮名の短い単語を読むことや平仮名カードでイラストの名前を作る活動により、様々な単語の音韻意識が高まり、一音ずつ意識しながら明瞭に発音することができる単語を増やすことができた。

（エ）成果と今後の課題

　身近な教師や同じクラスの友達との言葉による簡単な会話の中で、身振り手振りを交えて、ほぼ正確に自分の伝えたいことを伝えることができるようになってきた。

イ　実践事例（小学部４年　男子）

（ア）中心的な課題

中心的な課題	「楽しい」「嬉しい」などの肯定的な気持ちを言葉に表すことができるが、「嫌だ」という気持ちを他害という形で表出してしまうことがある。

（イ）指導目標の設定

長期目標	自分の気持ちを言葉や表情で表出することができる。
短期目標	表情カードを見て、気持ちを表す言葉と結び付けることができる。

（ウ）指導の状況（指導場面、指導内容と手立てを含む）

４～６月	絵本の読み聞かせで、登場人物の表情やせりふから気持ちを想像して、選択肢の中から選んだり、言葉にしたりする。【国語】

【考察】表情を見て適した言葉を当てはめることができたことから、その表情が意味する感情を理解していると考えられる。

７～９月	様々な表情が描かれたカードを見て、その表情が表す気持ちを想像して、「快」の箱と「不快」の箱の二つに分類する。【自立活動】

【考察】口角が上がっている顔は「快」の言葉（嬉しい、楽しい）、下がっている顔は「不快」の言葉（悲しい、イライラする）に分類した。表情の快・不快の違いについても、読み取りができている。

１０～１２月	・友達との間で「嫌だ」と思ったときには「やめて」と言ってよいことを伝え、様子を見る。【自立活動、休み時間】

（エ）成果と今後の課題

「やめて」という言葉が自分から言えるようになり、他害が減少した。しかし言葉の理解が難しい友達には「やめて」が理解してもらえず他害をしてしまうことがあるため対策を考える必要がある。

ウ　実践事例（小学部６年　男子）

（ア）中心的な課題

中心的な課題	手指動作の獲得

（イ）指導目標の設定

長期目標	中学部進学に向け、制服や作業学習で用いる手指動作を身に付けることができる。
短期目標	固結びやちょう結びをすることができる。

（ウ）指導の状況（指導場面、指導内容と手立てを含む）

４～６月	イラストの手順表を見ながら固結びやちょう結びの練習。 固結びでできる簡易的なちょう結びの練習。【日常生活の指導、自立活動】

【考察】ちょう結びは、手順表のやり方になると特定の部分で理解できず手が止まってしまっていた。簡易的なちょう結びは固結びと似ているため、取り組みやすかったのではないかと考える。

７～９月	ちょう結びの動画を見ながら色の異なるひもを用いたちょう結び（簡易的ではない）の練習。【日常生活の指導、自立活動】

【考察】本児は、簡易的なちょう結びに対して難しそうだからと前向きではなかったが、動画や具体的な言葉掛けを行ったことでやり方が分かり、ちょう結びに取り組むことができたと考える。

１０～１２月	○箱のひも結び教材を上履きの近くに置き、しゃがんで片足ずつひも結びをする。 ○上履きの上から自分の足に直接ひもを巻いてちょう結びをする。 【日常生活の指導、自立活動】

（エ）成果と今後の課題

難しいことへの挑戦には抵抗感があったが、継続した練習やできた経験を積んだことで自信をもちひも結びができるようになった。今後は靴ひもだけではない手指動作の獲得も目指していきたい。

（２）テーマⅡ「自立活動に関するねらいと指導内容の整理」

①　「自立活動指導内容一覧表」の作成

ア　作成の意義

自立活動の指導内容については、教科指導のようにあらかじめ決まっているものではなく、実態把握に基づき、指導目標を達成するために、学習指導要領に示されている自立活動の内容の六つの区分（「健康の保持」「心理的な安定」「人間関係の形成」「環境の把握」「身体の動き」「コミュニケーション」）から必要な項目を選定し、それらを相互に関連付けて個別に設定されるものである。

そこで、自立活動の指導を円滑に進めるに当たっては、項目ごとの具体的な学習内容を明らかにし、指導内容表として整理しておくことが有効であると考えた。そこで、本校小学部独自の「自立活動指導内容一覧表」を作成することとした。

イ　作成の手順

令和４年度は、まず初めに自立活動の６区分２７項目について、栃木県教育委員会の「特別支援学校教育課程編成の手引（小学部・中学部）」を参照しながら確認を行った。次に、本校もしくは前任校問わず、今までの自立活動の授業において実践してきた内容を各自で振り返り、指導内容表作成に向けた素材（実践内容）を「自立活動実践内容記録表」（表３）へ入力した。そして、他県の内容表や自立活動に関する関係書籍を参考にしながら補充を進めた後、記録表のデータを「自立活動指導内容一覧表」に移動させた。以上のような取り組みを経て、小学部所属の教員全員分の実践を集約し、「自立活動指導内容一覧表」を作成した。

令和５年度は、前年度作成した「自立活動指導内容一覧表」を基に、更なる内容表の充実を目指した。昨年度以前から小学部所属の教員は、日頃行っている指導を自立活動の側面から見直し、入力の少ない項目を中心に追加入力を進めるとともに、今年度より小学部所属の教員は、「実践内容記録表」を新規に作成し、一覧表に反映させるようにした。

ウ　「自立活動指導内容一覧表」について

自立活動の六つの区分ごとに表が分かれており、各区分の項目ごとに学習内容がまとめられたものである。表４として「身体の動き」に関する一覧表、表５として「コミュニケーション」に関する一覧表を掲げる。一覧表について、最も入力が多かった区分は「身体の動き」で、次いで「コミュニケーション」となっている。「身体の動き」の各項目の中では、「作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること」の学習内容が最も充実している。無記入は無いものの、区分及び項目によって入力状況には差がある。

なお、学習内容とともに、ねらい（指導目標）や指導の具体例、使用教材についても併せて表記することとし、具体的に指導内容を検討する上で役立てやすいように工夫を図った。また、複数の区分が関連し、一つの区分に位置付けることが難しい学習内容については、ねらい（指導目標）との関連性が最も高い区分及び項目の中に類別することとした。

②　「自立活動指導内容一覧表」に関するアンケートの実施

ア　アンケートの目的　上記の取り組みを踏まえ、「自立活動指導内容一覧表」の活用状況や課題などを把握するために、小学部に所属する教員（２６名）全員を対象にアンケートを実施した。

イ　アンケートの内容と回答状況　以下の設問内容について、設問１、設問５、設問６を除き、記述

式で回答を求めた。（令和５年１１月実施）
【設問１】「どんな時に一覧表に目を通したか？」については、研修で（２０名）が最も多く、自立活動の指導の参考にするため（６名）、その他（０名）であった。
【設問２】「自立活動指導内容一覧表」の学習内容で自身の参考にしたものや今後取り組んでみたいものについては、「身体の動き」の手指の巧緻性に関する内容が多くあげられていた。次いで、「コミュニケーション」の顔の体操（舌・口周りを含む）や発音の仕方に関する内容、「人間関係の形成」の集団・個別で行うゲーム（例：ボール渡し、配達ゲーム、カルタ）が多かった。
【設問３】「自立活動指導内容一覧表」の具体例・教材等で自身の参考にしたもの、今後取り組んでみたいものについては、手先を使った活動や粗大運動を主とした「身体の動き」に関する回答が多く、「コミュニケーション」や「環境の把握」に関する内容が続いた。
【設問４】「自立活動指導内容一覧表」で参考になったことや気付き（区分や項目の捉え方など）については、他の先生方の実践（指導）内容が自身の指導の参考になったという意見が大半を占めた。また、自身の指導内容を整理する機会となったことや自立活動の目標を明確にして指導に取り組む重要性を確認できたなどの意見も寄せられた。「自立活動指導内容一覧表」については、少数意見ではあるが、発達段階の目安を付けてはどうか、学習内容が広く捉えられている場合にはより具体的な内容になると良いのではないかといった意見があげられた。
【設問６】「自立活動指導内容一覧表」を今後活用するにあたって取り組めそうなことや取り組んでみたいことについては、「自立活動指導内容一覧表」を活用した授業実践が１６名で最も多かった。次いで、「自立活動指導内容一覧表」の更なる内容の充実（指導内容、実践例等を文献などで調べる）が６名、自立活動の区分や項目に注目した検討会が４名であった。
【設問７】自立活動の指導内容を設定する際に意識していること（複数回答可）については、主体的に取り組むことのできる指導内容（興味関心・成就感・肯定的）が２１名で最も多く、発達の進んでいる側面を更に伸ばすような指導内容が１６名、改善・克服の意欲を喚起する指導内容（実践的な活動）が１０名となり、回答数が多かった。次いで、自己選択・自己決定を促す指導内容が７名、自ら環境を整える指導内容が０名であった。
ウ　「自立活動指導内容一覧表」に関するアンケート結果の考察
　アンケート結果より、作成した「自立活動指導内容一覧表」については、自立活動の指導の参考にしたという教員の数は三分の一程度にとどまったが、残りの教員全員についても研修の機会を利用して一覧表の内容を確認しており、二年間の研究を通じて小学部全体で一覧表を共有化することができたものと考える。また、他の教員の取り組みを自身の指導の参考にできたという意見が大半であったことからも一覧表の有効性を再確認することができた。
　また、一覧表の中で参考にした内容や今後取り組んでみたい内容には、顔の体操、発音の仕方に関するもの、手先を使ったちょう結びが含まれていた。これらについては、テーマⅠに関する事例検討会において実際に紹介された実践内容と共通するものであった。そこで、一覧表の内容については、事例検討会を通じて検証していくことも活用につながる方策になると思われた。

表３　「自立活動実践内容記録表」

ねらい・指導目標	学習内容	具体例・教材等
（例）指先の巧緻性	ビーズのプットイン（親指と人差し指）	・薬剤ケースにビーズを入れる。
衣服の調整	気温計を使用した指導	・「20℃以上は半袖」、「15℃以下は上着」など、気温に応じた衣服を検討する。
自分の気持ちを伝える	気持ちカードから自分の気持ちを選ぶ	・2枚の気持ちカードから自分の気持ちを選ぶ。

表４　自立活動指導内容表「５　身体の動き」（一部抜粋）

項目	ねらい・指導目標	学習内容	具体例・教材等
(1)姿勢と運動・動作の基本的技能	両手を使った動き	ビーズコースター	・右手・左手を使ってビーズを移動させる。ビーズの大きさやコースの形状に配慮する。
	姿勢の保持	動物模倣を利用したヨガ運動	・音楽にあわせてゆったりとした動きを行う
	投げる技能の習得	的当て	・ビーンズバックを使い、的に向かって投げる。順番を決めて行う。
	跳ぶ技能の習得	フラフープ跳び	・背後からフラフープを回し、足元にきたタイミングで両足をそろえて跳び越す。
	鼻呼吸動作の獲得	匂い当てクイズ	・複数の蓋つきケースに綿を入れ、その中の一つにアロマオイルなどの匂いのするものを湿らせる。匂いがするのはどれかを当てる。口を閉じるのが難しい場合は、板のアイススプーンなどを唇ではさむ。
	姿勢の保持	三角マット座り 丸椅子（背もたれなし椅子）座り	・固めのウレタンマットを傾斜をつけて三角に成形し、足底を床につけて三角マットに座り続ける。 ・背もたれのない椅子に常時座る。
(2)姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用	姿勢の保持	座位や立位での姿勢の保持	・斜めに切った発泡スチロールをおしりの下にひく。
	姿勢の保持	スクーターボード遊び	・座位や四つ這い、腹ばいの姿勢でスクーターボードに乗って前進する。手でこぎながら前進する。
	姿勢の保持・手足の協応動作	・サーキット運動 ・ヨガ	・バランスボールに乗って、バランスを保ちながら弾む。手を上でクラップする。リズミカルに左右交互に足踏みする。 ・ヨガのポーズをじっくりととって、手や足の伸ばす部分を触るなどして意識する。
	姿勢の保持	バランスボールの椅子	・バランスボールの上に座り机上学習を行う。
(3)日常生活に必要な基本動作	指先の巧緻性	洗濯ばさみ	・洗濯ばさみをケースや紙皿などに留めていく。
	指先の巧緻性	箸	・大きさの異なる立方体のスポンジを皿から皿へ箸で移す。
	日常生活動作 心理的な安定	階段の上り下り	・日常生活に必要な動作の獲得。回数を数えながら反復練習する。 ・段差が苦手な児童に対して継続することで慣れさせる。（校外学習等に向けて）
	指先の巧緻性	チャックの開閉	・フェルトに縫い付けたチャックを、縦向き横向きで開ける。
	手指の巧緻性	ちょうちょ結び	・左右で色の違う紐を利用しちょうちょ結びの練習を行う。
	目と手の協応	キャップの開閉	・ペットボトルの蓋や、しょうゆ差しのキャップの開閉。
(4)身体の移動運動力	粗大運動	ウレタンマットの山登り	・ウレタンマットを高く積み、腕や足の力でよじ登る。
	粗大運動	飛び石渡り	・ホウルやマットなどを使用し、飛び石を作る。実態に応じて幅を変えて実施する。
	粗大運動	梯子渡り	・巧技台と梯子で橋を作り、高這いの状態で渡る。慣れてきたら手を使わずに立って渡る。
	粗大運動	トンネル	・四つ這いやしゃがむ姿勢でトンネルをくぐる。
	粗大運動	トランポリン	・体幹を鍛える。音楽を使用し、曲が終わったら友達と交代する。
	立位での着替え	粗大運動	・四つん這い、熊歩き、一本橋、ぞうきんがけなど。
	ボディーイメージとバランス感覚の獲得	階段の昇り降り	・ミニハードルまたぎ、ジャンプ、四つん這いや熊歩き、ぞうきんがけなどの粗大運動。
(5)作業に必要な動作と円滑な遂行	目と手の協応	ビーズのひも通し	・つづりひもにビーズを通す。ビーズの大きさに配慮。
	目と手の協応	ボールペンの分解	・ボールペンを分解し、部品ごとに分けてケースに入れる。
	目と手の協応	ボールペンの組立て	・手順どおりに組み立てる。
	目と手の協応	ブロックの組み立て	・写真によるジグや完成品の見本を見ながらブロックを組み立てる。
	指先の巧緻性と手首の動き	くねくねひも通し	・小さく切ったストローを平面にジグザグに並べ、靴紐を通す。
	目と手の協応	紐とおし	・穴を開けたスポンジシートに紐を順番に通す。
	身体の動き ・指先の巧緻性を高める	安全ピンさし	・目印に針を刺し、ピンを留める。

表５　自立活動指導内容表「６　コミュニケーション」（一部抜粋）

項目	ねらい・指導目標	学習内容	具体例・教材等
(1)コミュニケーションの基礎的能力	コミュニケーション 人間関係の形成	キャスターボード	・教師が引っ張り一定時間走る。「もう一回」や「お願い」などの言葉やサインが出たら継続する。
	コミュニケーション ・発声	発声「あ」	大きいあ、小さいあ、あ、あ、あーのあーーー ○○さんの○○さんの○○さんの、あー ○○君の○○君の○○君の、あー
	コミュニケーション ・息を吐くこと	呼気「ふう」	「ふう、ふう、ふこうよふう、ふいたら袋がとんでったー、ふうー。」（牛乳用ストローの袋とストロー）
	自分の気持ちを伝える	気持ちカードから自分の気持ちを選ぶ	・2枚の気持ちカードから自分の気持ちを選ぶ。
	コミュニケーション ・気持ちの理解	表情カードの活用	・友達とのトラブルの際などに、表情カードの中から自分の今の気持ちを選ぶ。
	言葉	母音の発音	・母音の口の形を見ながら、母音の練習をする。
	言葉	声出し	・風船に向かって声を出す。声で風船が振動をした感覚を楽しむ。
(2)言語の受容と表出	発音の仕方	発音の仕方を確認する。（ビデオも使用）	・事前に苦手な発音を確認しておき、教師と一緒に文字カードを読む。その様子をビデオで撮影し、自己のイメージとのギャップを確認する。
	口腔機能の向上	舌・口周りの体操	・鏡で自分の舌や表情を確認しながら、モデルの写真やイラストを模倣する。 （舌の体操・あいうべ体操・動物体操）
	音韻意識の向上	短い単語を読む	・2~5文字の単語を一音ずつ読む。
	・様々な口の動き方を経験する ・口周りの筋肉を使う	口唇・頬、舌を意識的に動かす。	・吹き戻し ・口の体操
	ことばあそび	あなたの「あ」などで声を出す	言葉をつかったやりとりの楽しさを味わう。
(3)言語の形成と活用	人間関係の形成 コミュニケーション	のびーる粘土をつかったおすしやさんごっこ	・ビデオを撮りながら、のびーる粘土を使ってお寿司屋さんごっこを行う。 ・撮影したビデオを見て振り返りながら、さらに活動を進める。
	語彙の拡充	しりとり	・テーマ（例：食べ物）や条件（例：三音節程度）を設定し、文字で表記しながら行う。
	言語概念の形成	言葉クイズ	・絵カードを使い、反対言葉を答える。 ・問題文を聞き、言葉を答える。（なぞなぞ）
	語彙や身振り手振りコミュニケーションの拡充	伝えようゲーム	・動物や乗り物などのイラストカードを見て、相手に言葉や身振り手振りで伝えるゲームに取り組む。
	気持ちにまつわる語彙の拡充	絵本の登場人物の気持ちを考えよう	絵本の読み聞かせを聞いて、登場人物の表情を見て気持ちカードから当てはまりそうな気持ちを選んだり、言葉で伝えたりする。
(4)コミュニケーションの手段の選択と活用	コミュニケーション	絵カードを通した要求	・絵カード（写真カード）を使用して、やりたい活動を選ぶ練習。選んだ物は実際に活動する。タイマーで区切り、複数回行う。
	人間関係の形成 コミュニケーション	今日の約束	・ルールブックの内容を日めくり形式にし、今日の約としてを朝の会で事前に確認し、望ましい行動を意識できるように促す。 ・帰りの会の時には一日の振り返りを行う。
	コミュニケーション	報告カード	・行きたい場所や借りたい物が描かれたカードを使い、教師に「○○へ行ってきます」などと報告をする。
	・ハンドサインを使ったコミュニケーション	・「ください」「だっこ」「せんせい」のハンドサインを使った会話をする。	・様々な会話の中でハンドサインを使って伝えることを繰り返し取り組む。
	コミュニケーション 言葉	劇遊び	・簡単な話（大きなかぶなど）を劇ごっこをする。（簡単なお面などを使って）
(5)状況に応じたコミュニケーション	他者を意識した運動	雨どいを使ったボール渡し	・短く切った雨どいを使い、バランスを保ってボールを運ぶ。そのまま、同様の雨どいを持った友達に渡して移動する。
	コミュニケーション能力の向上	連想ゲーム	・本やカード（絵や写真）等を活用し、ヒントを考えて相手に質問したり、ヒントから連想される言葉を答えたりする。
	コミュニケーション能力の向上	ソーシャルスキルトレーニング	・ぬいぐるみやパペットを使い、実際の場面を想定しながらやりとり遊びやごっこ遊びを行う。
	他者を意識した運動 コミュニケーション	シーツを使った列車ごっこ（低~中学年）	・ペアになりたい友達（シーツに座る人）を選び、ゴールまで運ぶ。力が弱い児童は人形を運ぶ。
	コミュニケーション	場面や状況を伝える	・身近な出来事を、接続詞を使って説明する。言葉を誘発させるような質問をする。

４　成果と課題

（１）テーマⅠ「自立活動における指導目標・指導内容設定シートを活用した個別の指導計画と評価の工夫」について

「自立活動シート」の作成及び活用を通して、児童の実態把握の際には自立活動の６区分を意識することや、その実態把握に基づいて得られた指導すべき課題についてそれぞれの課題の関連性を結び付けていき、整理した中で導き出される「中心的な課題」を基に、個別の指導計画の目標や指導の手立てを設定するまでの一連のプロセスについて小学部全体で共通理解を図ることができた。このことにより、「自立活動シート」の活用における有効性を確認することはできたが、適切な実態把握と中心的な課題の抽出に伴う背景や要因の分析に関しては、今後も研究を継続しながらスキルアップを図っていく必要がある。また、「自立活動シート」の活用により、学習グループの複数の教員間において、児童の実態把握、指導・支援方法、評価などを整理しながら共有することができた。そこで、今後も、ＰＤＣＡサイクルを念頭に置き、目標設定時と評価の時期には「自立活動シート」を活用しながら複数の教員による話し合いを実施するなどして学校課題研究と関連付けた丁寧な取組を進めていきたい。そして、評価の在り方についても、個別の指導計画の目標や内容の設定と関連させながら明確な観点に基づいて行えるように検討していく。

事例研究については、事例検討会を通して、複数の教員の視点から支援の方向性や改善策が話し合われることにより、その後の指導に効果的に役立てられただけでなく、自立活動の指導に必要な視点を再認識できる機会となっており、事例を提供した教員だけでなく、参加した教員全員の自立活動に対する意識を高め、実践力の向上につながっていることを確認することができた。今後も、事例検討会における指導事例や教員間の情報交換を通じて、うまくいっている事例から、有効な手立て（教材、教師の支援、環境調整等）を具体的に見出しながら共有していくことが求められる。

（２）テーマⅡ「自立活動に関するねらいと指導内容の整理」について

本研究を通じて、本校小学部独自の「自立活動指導内容一覧表」を完成させることができた。この一覧表は、各項目における学習内容を具体的にイメージしやすくなり、指導計画を検討する上での参考資料の一つとして大いに役立てられていくことが期待できる。そこで、今後は「自立活動指導内容一覧表」の活用の推進に向けて、実践事例を通して指導場面や教材の活用方法を具体的に確認する取組を行い、一覧表の内容に関する検討を重ねていくことが必要であると思われる。

また、小学部担当の教員は、自立活動の指導において、特に、手指の巧緻性やコミュニケーションに関して、指導内容や具体例・教材等への関心が高く、実践に役立つ内容を求めていることが明らかとなった。これらは、本校小学部の学部目標に取り上げられている基本的な生活習慣の習得やコミュニケーションの基礎的能力の育成の上でも重視されるべきものである。そこで、「自立活動指導内容一覧表」について、キャリア教育の視点から小学部段階で求められる学習内容や指導の視点に関する整理を行い、共有していく取組も進めていきたいと感じた。

５　参考文献

栃木県教育委員会　特別支援学校教育課程編成の手引［小学部・中学部］　２０１９

福島県特別支援教育センター　小・中学校、高等学校におけるインクルーシブ教育システム推進のためのコーディネートハンドブック　２０２０

熊本大学附属特別支援学校　自立活動アセスメントツール　２０１９

Ⅲ　中学部

「授業において、生徒自身が何を学び、何ができるようになったかが分かる自己評価シートの作成と授業改善」

１　研究の目的（趣旨）

特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編（小学部・中学部）第２章第４節の１の（４）では「生徒が自主的に学ぶ態度を育み、学習意欲の向上に資する観点から、各教科等の指導に当たり、児童生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるように工夫することが重要である。」、「学習の見通しを立てたり振り返ったりする機会を設けることは児童生徒の学習意欲が向上するとともに、学習内容の確実な定着が図られ、各教科等で目指す資質・能力の育成に資するものと考えられる。」とある。第２章第４節の３の（１）においては「『児童生徒がどういった力が身に付いたか』という学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにするためにも、学習評価の在り方は重要であり、教育課程や学習・指導方法の改善と一貫性のある取り組みを進めることが求められる。」とある。

以上を受けて、本研究では単元や各授業において、生徒自身が何を学び何ができるようになったかが分かることを目標に掲げ、単元指導計画の改善と自己評価シートの作成と活用を行った。

２　研究計画

実施年度	内　　容
Ｒ４年度	・研究内容の検討、計画（４月） ・実施済みの単元指導計画の見直し（５月～１２月） ・単元の自己評価シートの項目の検討、作成（５月～１２月） ・単元指導計画を用いた授業実践（５月～３月） ・自己評価シートの様式の検討と作成（５月～８月） ・自己評価シートの活用及び改善（９月～３月）
Ｒ５年度	・研究内容の検討、計画（４月） ・各作業班で使用する評価シートの作成（４月） ・実践及び改善（５月～３月） ・研究のまとめ

３　実践

（１）生活単元学習

令和４年度は、学年を超えて３グループを編成し、各グループの中で一人３単元程度を分担し、全員で単元指導計画の見直しと振り返りシートの作成に取り組んだ。

＜グループ別単元分担表＞

	A グループ	B グループ	C グループ
1学期	新しい学年、夏の生活 洗濯をしよう①②、 南那須中との交流①②	運動会、徒歩学習 掃除をしよう、防災教育① 奉仕活動、職場見学	栽培、調理①②③ 校外学習へ行こう 校外宿泊学習へ行こう
2学期	２学期の生活 人権・道徳教育 冬の生活	発表をしよう 防災教育②③	校内宿泊学習 修学旅行へ行こう 栽培②
3学期	３学期の生活 新年を迎えて 卒業を祝う会に向けて	防災教育④、選挙について 立志式に向けて 受検に向けて	調理④、1年間を振り返って・進級に向けて 卒業に向けて

①単元指導計画の見直し

中学部の単元指導計画は、生徒の実態の幅が広いため、単元目標のほかに２段階の具体的目標を立てている点が他学部と大きく異なる。また、前年度までの学部研究の中で、単元指導計画の目標、関連する教科の系統性や段階、「主体的・対話的で深い学び」の視点を踏まえた「指導上の留意点」などについて検討し、作成を行ってきた。

令和４年度は、昨年度作成してきた単元指導計画をさらに「単元目標の妥当性」「関連する教科の妥当性」「めあての具体化」の三つのポイントを基に、各担当者が見直しを行うことにした。

ア　単元目標の妥当性

まず、令和３年度に作成した単元指導計画の「単元目標」「具体的目標」「関連する教科」の内容が学習指導要領とあっているか、「育成を目指す資質・能力の三つの柱」が入っているかなどの確認を行った。

前回の研究に引き続き、学習指導要領や学習指導要領解説と照らし合わせながら目標や関連する教科の内容を別の教員が見直すことで、妥当性の確認だけでなく学習指導要領の内容の理解にもつながった。また、三つの柱の表記を（知・技）（思・判・表）（学び）から①②③へ変更したことで、三つの柱が含まれているか確認しやすくなった。

イ　関連する教科の妥当性

次に、関連する教科の内容が学習内容やめあて、指導上の留意点に反映されているかの確認を行い、関連する教科の妥当性を検証した。

ウ　「めあて」の具体化

令和３年度までの研究の課題点として、「めあて」（一時間の授業のねらい）の示し方の工夫まで共通理解を図ることができなかったことが挙げられていた。そこで、今回の見直しでは、できるだけ具体的に、この授業時間で生徒たち自身が『何が』・『どのように』・『どれくらい』できればよいのかが分かるような示し方を検討した。

まず、より生徒に分かりやすい言葉で伝えるために、「～をしよう。」または「～する。」という表記に変更した。次に、この題材の「めあて」を基に、さらに一時間の授業ごとに『どのように』『どれくらい』できるかなどの具体的で分かりやすい「めあて」の提示を意識して取り組んだ。

単元指導計画（ 生活単元学習・中学部 ）

番号	15	実施月	9～12月	時 数	14時間
単元名	家庭の仕事	学部学年	中学部1年	担当者	

単元目標		1 家庭の仕事について知り、それらの中で自分にできることや工夫できることについて考えることができる。 2 いくつかの実践を通して、できることを増やし、継続して取り組むことができる。
具体的目標	A	1 家庭の仕事について知り、それらの中で自分にできることや工夫できることについて気付くことができる。 2 いくつかの実践を通して、やり方を覚え、学校や家庭で継続して取り組むことができる。
	B	1 家庭の仕事について知り、それらの中で自分にできることについて教師と一緒に考えることができる。 2 いくつかの実践を通して、やり方を知り、学校での役割や家庭での手伝いに生かすことができる。
関連する教科	国語	・文字の形に注意して丁寧に書いたり、発音や声の大きさに気を付けて発表したりすること。① ・自分の意見を述べたり相手の意見を聞いたりすること。②
	社会	・集団生活の中で何が必要かに気付き、自分の役割を考えること。 ②
	職・家	・家：家庭における役割について関心をもち、知ること① ・家：家庭生活に必要なことや自分の果たす役割役割に気付きそれらを他者に伝えること② ・食：健康な生活と食事の役割や日常の食事の大切さについて知ること① ・食：簡単な調理の仕方や手順について知り、できるようにしたり、調理計画について考えたりすること① ・住：整理整頓や清掃の仕方について知り、実践しようとすること①
道徳項目		遵法精神、公徳心

学習内容(時間)	指導上の留意点		準備物等
題材名：家庭の仕事について（導入） （2時間）	めあて	・かていにはどんなしごとがあるのかしろう。 ・じぶんにできそうなしごとをかんがえよう。	PC ワークシート
	・これからの学習の流れや活動内容が理解しやすいよう視覚的な教材を用意し、確認をする。 ・実際にににこハウスを家庭に見立て、イメージしやすくする。		
題材名：洗濯について知ろう ①洗う ②アイロンをかける ③畳む （4時間）	めあて	・どうぐのつかいかたやてじゅんをしろう。 ・あんぜんやてじゅんをいしきしてやってみよう。	洗剤 アイロン 体操着
	・生徒の実態に応じて教師が手を添えたり、代わりにやって見せたりする。 ・手本を示したり、見本をおいたりして自分で確認できるようにする。		
題材名：食事について知ろう ①栄養について ②メニューを考えよう ③皿の洗い方 （4時間）	めあて	・しょくじのやくわりをしろう。 ・バランスをかんがえながらメニューをきめよう。 ・さらをあらうてじゅんをしろう。	PC ワークシート 食器
	・栄養素のグループごとに色を分けたり、分かりやすい言葉を用いてイメージしやすくする。 ・皿の洗い方をやって見せ、さらに汚れを意識しやすいように、目立つもので実際に皿を汚して取り組みやすくする。		
題材名：掃除について知ろう （3時間）	めあて	・どうぐのしゅるいをしろう。 ・ばしょにあったそうじのしかたをしろう。	PC フローリング モップ
	・スライドを見てやり方を学習し、実際に自分でやってみることで、イメージしやすくする。にこにこハウスでより実際の家庭に近い形で取り組ませる。		
題材名：事後学習 （1時間）	めあて	・たいけんしたこと、わかったことなどをふりかえろう。 ・できそうなことをみつけよう。	PC ワークシート
	・写真用いて思い出しやすくし、体験したことや感想をまとめることで振り返り、理解を促す。 ・生徒の実態に応じ、冬休みの手伝いとして継続を促す。		

エ　単元指導計画の改善と授業実践

生単グループで見直した単元指導計画を、実際に授業を行う担当者が確認しながら単元指導計画の改善、作成を行い、それを基に授業を行った。

前回の研究から中学部で共通理解して取り組んでいる「めあて」と「やること」の提示を授業開始時に行い、この時間で、何が・どのくらいできるようになるのか、生徒たちに分かりやすく提示することを意識して取り組んでいる。

写真１「家庭の仕事」（食事について知ろう）授業風景

②自己評価シートの作成

令和３年度に振り返りシートを試行的に一部の学年で作成し、授業の終わりには、丁寧に振り返りを行ってきたが、今回の研究では、全学年を対象に、「めあて」が実現されたかどうかを適切に評価するために、「めあて」に準拠した評価の仕方について検討を行った。

ア　振り返りシートの作成

まずは、全学年共通で、授業の終わりに振り返りの時間をしっかりと設定するようにした。

図１のようにワークシートの終わりに各自が自己評価できるような形式、図２のようにパワーポイントで学習グループ全体が同じ評価をするような形式で振り返りを実施した。授業の終わりに振り返りの時間を十分に確保するのが難しいなどの課題はあるが、中学部全体で丁寧な振り返りを意識することができた。

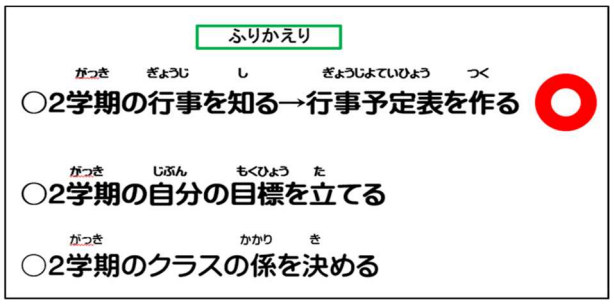


図１　ワークシートによる振り返り

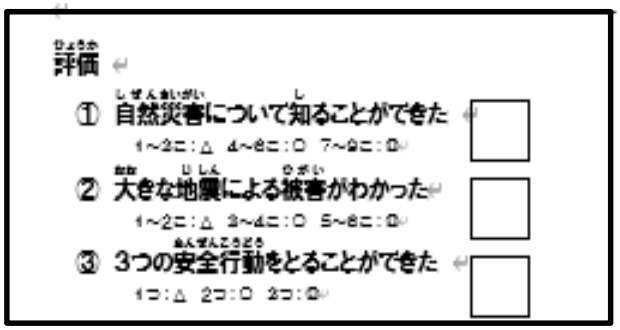


図２　パワーポイントによる振り返り

イ　自己評価シートの作成

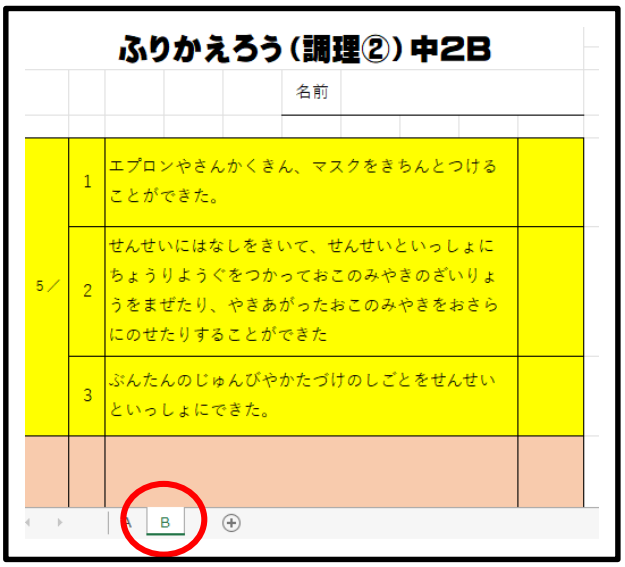
次に、振り返りをさらに個に応じたものにしていくために、自己評価シートの作成に取り組んだ。評価の項目は一授業に対して三つ程度とし、項目の内容は、めあてに対する評価を一つと関連する教科に関する評価を二つとした。また、個に応じた評価につなげるため、図３にあるように、単元指導計画の具体的目標同様、A・B２段階で作成を行った。

ふりかえろう（調理②）中2 A

名前

5／	1	せいけつにちょうりできるよう、さんかくきんにかみがはいるようかぶったりマスクをきちんとつけたりすることができた。	
	2	てじゅんひょうをみながら、ちょうりようぐをただしくつかって、おこのみやきをつくることができた。	
	3	ともだちとぶんたんして、じゅんびやかたづけをすることができた。	

A　B



ふりかえろう（調理②）中2B

名前

5／	1	エプロンやさんかくきん、マスクをきちんとつけることができた。	
	2	せんせいにはなしをきいて、せんせいといっしょにちょうりようぐをつかっておこのみやきのざいりょうをまぜたり、やきあがったおこのみやきをおさらにのせたりすることができた	
	3	ぶんたんのじゅんびやかたづけのしごとをせんせいといっしょにできた。	

A　B

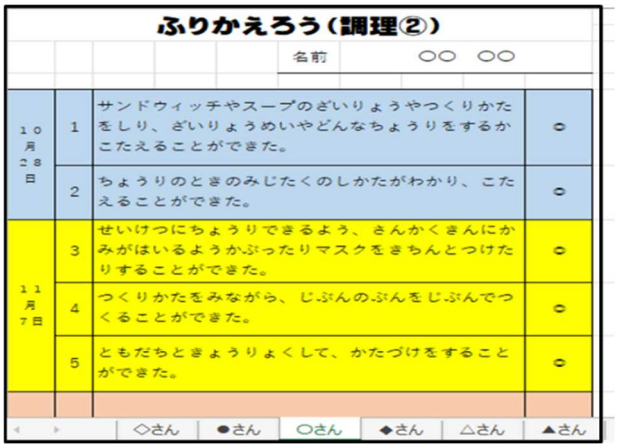
図３　自己評価シート

ウ　自己評価シートを活用した授業実践

生単グループが作成した振り返りシートを基に、授業担当者が実際の授業に合わせて自己評価シートを作成した。

【使用例１】

生単グループで作成したＡ・Ｂの振り返りシートを学級の生徒の実態に応じて選び、単元で一つのブックにまとめる形式



ふりかえろう（調理②）

名前　○○　○○

１０月２８日	1	サンドウィッチやスープのざいりょうやつくりかたをしり、ざいりょうめいやどんなちょうりをするかこたえることができた。	○
	2	ちょうりのときのみじたくのしかたがわかり、こたえることができた。	○
１１月７日	3	せいけつにちょうりできるよう、さんかくきんにかみがはいるようかぶったりマスクをきちんとつけたりすることができた。	○
	4	つくりかたをみながら、じぶんのぶんをじぶんでつくることができた。	○
	5	ともだちときょうりょくして、かたづけをすることができた。	○

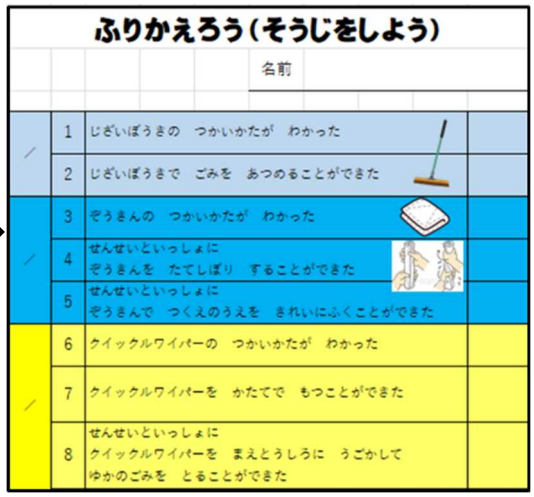
◇さん　●さん　○さん　◆さん　△さん　▲さん

【使用例２】

一時間の授業の振り返りを全員で見られるように作成し、振り返りの後に単元ブックの各自シートにまとめる形式

ごみやよごれにあわせてそうじをしよう

なまえ	ないよう	ひょうか
	①どんなごみやよごれがあるかがわかった	
	②よごれをみて、どうぐをえらぶことができた	
	①どんなごみやよごれがあるかがわかった	
	②よごれをみて、どうぐをえらぶことができた	
	①どんなごみやよごれがあるかがわかった	
	②よごれをみて、どうぐをえらぶことができた	
	①どんなごみやよごれがあるかがわかった	
	②よごれをみて、どうぐをえらぶことができた	



ふりかえろう（そうじをしよう）

名前

／	1	じざいぼうきの　つかいかたが　わかった	
	2	じざいぼうきで　ごみを　あつめることができた	
／	3	ぞうきんの　つかいかたが　わかった	
	4	せんせいといっしょに ぞうきんを　たてしぼり　することができた	
	5	せんせいといっしょに ぞうきんで　つくえのうえを　きれいにふくことができた	
／	6	クイックルワイパーの　つかいかたが　わかった	
	7	クイックルワイパーを　かたてで　もつことができた	
	8	せんせいといっしょに クイックルワイパーを　まえとうしろに　うごかして ゆかのごみを　とることができた	

【使用例３】

評価方法を◎（よくできた）○（できた）△（もうすこし）からイラストやより分かりやすい言葉で評価する形式

	もうだいじょうぶ	◎よくできた
	すこししんぱい	○できた
	まだまだむずかしい	△もうすこし

③成果と課題

令和４年度は、各授業担当者が作成した自己評価シートが、実際に使用してどうだったかを検証し、使用方法について検討、改善を行ってきた。評価方法や活用方法については、引き続き実施しやすい方法を検討していく。

生徒の評価を基に、生徒が授業においてどこまでできるようになったかを把握するとともに、どこが分かりにくかったのかについても把握し、教師自身の授業改善に生かすことができた。

今後は自己評価シートの評価を記録し、保存していくことで、個別の教育支援計画や年間指導計画、単元指導計画などの改善につなげていきたい。

（２）Ｒ５年度　作業学習

令和５年度は、「作業学習における各教科の基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるための個に応じた効果的な指導と評価の在り方」の検討を各作業班で取り組んだ。

手工芸班

①年間指導計画の改善

作業学習は、「作業活動を学習活動の中心にしながら、児童生徒の働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に学習するもの」という特徴がある。それを踏まえ、作業学習の指導は、職業・家庭科の内容を中心としながら、各教科等の授業における学習で得た知識や技能を生かせる場とし、各教科等の横断的な指導が効果的に行えるようにした。具体的には、関連する教科の内容が「学習内容」や「指導上の留意点」に含まれるように改善し、年間指導計画が個別の指導計画の目標設定や評価につながるようにした。

②電子黒板とタブレット型端末を使用した自己評価シートの工夫と授業改善

自己評価シートは、「作業内容」「目標」「評価」「頑張ったこと」「次回頑張ること」の欄を設けた。

・作業内容・・・手工芸班はミシン、さをり織り、マットの三つのグループがある。以前は作業内容に、グループ名を書いていたが、生徒が「何をするのか」、「何を作るのか」を理解した上で作業を行うことができるように、具体的な工程や製品名を記入するようにした。

・（本時の）目標・・・個別の指導計画の目標達成を見据えて、スモールステップで設定する。生徒が達成感を味わえるように、その日に達成できるような具体的な目標にする。

・評価・・・反省会前の日誌の記入時に、生徒が担当教員とその日の作業学習を振り返り、◎、○大、○、○小、△のいずれかを選択する。

・頑張ったこと・・・生徒自身が「頑張った」と思ったことを記入する。一人で考えることが難しい生徒は、担当教員と相談しながら記入する。
・次回頑張ること・・・（本時）の目標が達成した場合は、次のステップを記入する。目標が達成できなかったときは、なぜ達成できなかったのかを振り返り、より具体的な目標を立てるようにする。

A　作業学習の年間指導計画（関連する教科とその内容）の一例

職業・家庭	・道具を安全や衛生に気を付けて使用すること。
数学	・物差しの目盛の原点を対象の端に当てて測定すること。 ・長さ、重さについて、およその見当を付け、単位を選択したり、計器を用いて測定したりすること。

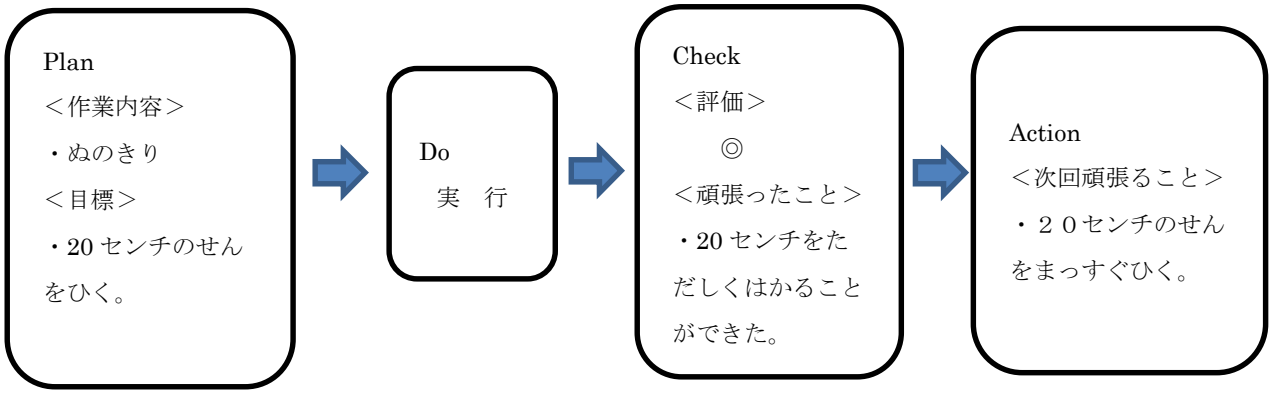
B　個別の指導計画の目標の一例

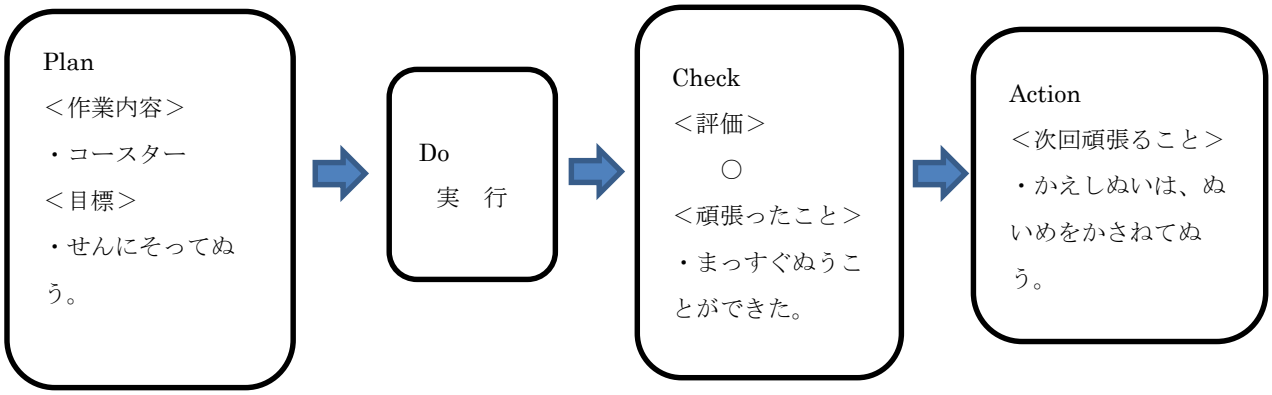
作業学習	・ミシンの使い方を覚えて、線に沿って縫うことができる。
数学	・計器を使って、いろいろな物を測定し、cm、g、ml の単位を表すことができる。

C　作業学習の学習内容と指導上の留意点（ミシン班）の一例

学習内容	指導上の留意点
・布の寸法を測り、はさみで裁断する。 ・ミシンで縫う。	・布の寸法を測って布に印を付ける際は、物差しの原点が布の端に当たっているかを確認する。 ・写真と文字で表した手順表を手元に置き、縫い方や注意点などを随時確認することができるようにする。

D　授業





③成果

年間指導計画において、関連する教科の内容が「学習内容」や「指導上の留意点」に含まれるように改善した結果、教師が関連する教科の内容を意識して指導を行うことができた。また、個別の指導計画の目標設定や評価に役立てることができた。

電子黒板とタブレット型端末を使用した自己評価シートを工夫した結果、教師と生徒が一緒にＰＤＣＡサイクルを回すことができ、個別の指導計画の目標達成につながった。

陶芸班

①評価シートの工夫点

令和４年度の、生活単元学習における自己評価シートの作成の取り組みを受けて、令和５年度は作業学習においても、作業内容や目標、評価を含んだ評価表を、全生徒分が見えるよう表示することにした。陶芸室の環境としては、各教室に設置されているプロジェクタが設置できないこともあり、これまで目標や評価、教材の提示などはホワイトボードに手書きで行っていたが、移動式の大型ディスプレイを陶芸室に常設し、毎回使用できるようにした。また、Teams 上で各担当教員が評価表を共有し、それぞれのタブレット型端末から入力できるようにした。

目標は当初、作業工程グループ内で同じ目標を立てていたが、目標設定、評価を個に応じて行うために、目標①を全体の共通目標、目標②を前時の「次回頑張ること」で生徒が記入した内容で設定し、指導時間中モニターで表示し目標について確認できるようにした。

評価表は、生徒が自分の項目を識別しやすいように顔写真を貼付したり、行を交互に色分けしたりした。

	名　前	内　　容	目　　標		評　価	次回がんばること
	○○　○○	さらづくり	①	はなしをよくきいてさぎょうする	◎	じぶんからほうこくする
			②	ていねいにつくる	大○	
	○○　○○	さらづくり	①	はなしをよくきいてさぎょうする	◎	じぶんからほうこくをする
			②	ていねいにつくる	大○	
	○○　○○	さらづくり	①	はなしをよくきいてさぎょうする	◎	おわったらほうこく
			②	ていねいにつくる	大○	
	○○　○○	さらづくり	①	はなしをよくきいてさぎょうする	◎	ねんどをこまかくする
			②	ていねいにつくる	ふつう○	
	○○　○○	さらづくり	①	はなしをよくきいてさぎょうする	大○	さいごまでがんばる
			②	ていねいにつくる	◎	

＜図４＞評価表

②実践時の工夫点

本時の目標を立てる際、作業日誌でそれぞれが前時に立てた「次回頑張ること」を確認すること、それを本時の目標にすることについて、板書や言葉掛けを繰り返し行い、習慣化を図った。陶芸班の特徴として、作業内容が日によって変わることがあるが、活動前に作業の仕方を示範したり、実態や興味に即した教材制作（ご褒美カードなど）を行ったりして、できるだけ生徒が見通しをもち、取り組むことができるように考慮した。

③成果（生徒の反応や変化）

＜自分の課題への意識＞・・・板書を見たり言葉掛けを受けたりして、自分から「次回頑張ること」を日誌の「本時の目標」の欄に記入する生徒が半数ほど見られるようになった。

＜課題を意識した活動＞・・・「きれいに」「ていねいに」など技術面については出来上がりの基準があいまいだったり、出来高を意識して急いでしまったりして、具体的に課題を意識することが難しい場合があったが、「挨拶・返事・報告」「姿勢」「指示を聞く」など態度面については、目標①の共通目標にし、ある程度の期間続けて指導することで、事前や作業中に教師の言葉掛けを受けて自分の課題を確認し、気をつけながら活動できる生徒もいた。生徒によっては、「これを頑張って〇〇のカードを見よう」という言葉掛けを受けて、活動に取り組むことができた。

＜振り返り＞・・・モニターで紹介される友達の「本時の評価」「次回頑張ること」に注目する生徒が増えた。

④修正点

月ごとの評価の集計表を作成し、月末に振り返ることで、「◎、大〇、〇、小〇、△」の数や、評価の変化を確認した。実際に作業内容は異なる日もあるが、目標①の共通した目標については、伸びや課題について視覚的に生徒自身が確認できるようになってきた。

① はなしをよくきいてさぎょうする

なまえ 名前	目標	9月4日	9月6日	9月11日	9月13日	9月20日	9月25日	9月27日
	①	◎😆	大〇😐	◎😆	大〇😐	大〇😐	◎😆	大〇😐
	②	◎😆	大〇😐	◎😆	◎😆	◎😆	◎😆	◎😆
	①	◎😆	◎😆	◎😆	◎😆	大〇😐	◎😆	◎😆
	②	◎😆	大〇😐	大〇😐	大〇😐	大〇😐	◎😆	◎😆
	①	◎😆	大〇😐	◎😆	ふつう〇😐	大〇😐	0	0
	②	ふつう〇😐	大〇😐	大〇😐	ふつう〇😐	大〇😐	0	0
	①	◎😆	大〇😐	◎😆	◎😆	◎😆	大〇😐	◎😆
	②	◎😆	◎😆	◎😆	◎😆	◎😆	大〇😐	◎😆

＜図５＞月毎集計表

⑤今後に向けて

態度面の課題については、目標①の共通目標にし、ある程度の期間続けて指導することで、生徒が課題を理解したり、毎回の変化を把握したりすることができた。技術面について、特に成型では、その日に仕上げなければならないこと、複数の工程があること、さらに道具の使用に技術が必要であることなど専門的な部分も多く、生徒の目標（例：きれいに、ていねいに）に対して、指導する側もどこまでやればよいか判断が難しいことがある。実態的に難しい生徒に対しての単純な工程の作業（新聞袋折り、粘土まるめ、粘土再生など）を取り入れることで、生徒が作業内容を理解して取り組め、指導側としてもより生徒の実態に即した課題把握や改善、必要な治具や教材といった教師からの支援も少しずつできている。製作の単純化や工程の改良が、今回作成した評価表の活用につながり、「本時の課題」→「どうしたらできるか」→「実践と修正」→「振り返り」の流れが習慣できてくると考える。

また、情報機器の使用で、目標や評価が見やすくなり、教員間で共有できることが多くなったが、タブレット型端末の動作が遅かったり文字や記号がうまく表示されなかったりすることで、準備や使用の支障になることがあるので、改善してできるだけ無理なく長期に活用できる評価のシステムを今後も検討していきたい。

エコ班

エコ班は男子１１名、女子１名の合計１２名の生徒が所属しており、障害の程度が中度から重度の生徒が多い。作業内容は①ペダル式空き缶プレス機（カバちゃん）を使用した缶つぶし②足つぶし機を使用した缶つぶし③プルタブ取り④缶の仕分け⑤花育作業となっている。エコ班では表題の研究を進めるにあたり、特に振り返りの時間における生徒及び教師の評価を基にした授業改善に力を入れて取り組んできた。

①自己評価シートの作成と活用および授業改善

評価シートを活用するねらいは、生徒たちが①視覚的に本時の目標を確認すること②前時から頑張るべき点を確認することを始まりの会で確認し意識付けを図ること③振り返りの時間において本時で何ができるようになったかがわかること④次時において頑張るべき点を確認することである。

年度当初のエコ班の振り返りの時間は１５分程度で、①日誌の記入②作業工程担当教員の確認、電子黒板への入力③指定された学年の生徒の発表④教師（Ｔ１）の話で構成されていた。

生徒たちの実態に合わせ、１学期は評価シートを図７のように作成した。顔写真の記載や色を分けた表示、評価の基準を顔文字で簡潔に示すなどして生徒たちの理解を促しやすく、注目を得られるよう工夫した。

4/24（月）	名前（学年）	きぎょうないよう	もくひょう	ひょうか	できだか	がんばったこと	じかいがんばること
	名前	あしつぶし	しごとをおぼえる	○	20こ	あしつぶし	すぴーどあっぷ
	名前	あしつぶし	しごとをおぼえる	◎	34こ	あしつぶし	しゅうちゅう
	名前	かばちゃん	しごとをおぼえる	☺	30こ	かばちゃん	やりかたをおぼえる
	名前	かばちゃん	しごとをおぼえる	◎	50こ	かばちゃん	やりかたをおぼえる

図６　１学期の評価シート

実践を進めていく中で、１２名の生徒の実態は様々であり、集中力の持続が難しかったり、他の生徒の頑張りを認める意識が薄かったり、話を聞く態度が身に付いていなかったりするなどの様々な課題が見えてきた。図６の評価シートは、電子黒板の１画面に収めることが難しく、生徒１１名分の評価を提示できないことや入力に時間が掛かってしまうことなどの課題があった。加えて頑張ったことや次回頑張ることが抽象的で、どんなことをどのように頑張ったのか、次回頑張ることを達成するためにどのような行動や意識が必要かについての記載がなく、次時への意欲につながりにくいことも課題の一つとして挙がった。また振り返りの時間の約１５分間の集中が難しい生徒も多く、指導体制や学習集団を再検討する必要性を感じた。

２学期からは振り返りの時間の学習集団を作業工程ごとの３～４名のグループで構成することとした。それに伴い評価シートは３～４名分を１画面にすることとした（図７参照）。評価シートの形式は選択式や記述式にする、視覚的に提示するなど各作業工程に属する生徒たちの実態に合わせて柔軟に作成した。また、評価基準を明確にし、生徒が作業の取り組みを正確に自己評価ができるようにした。

振り返り時間においては、全体でのフィードバックに重きを置いていたが、生徒と教師との個の対話を通した振り返りを重要視し、本時においてできたことや次時に頑張る点について具体的に確認ができるよう丁寧な言葉掛けや視覚支援を講じた。

上述の取り組みにより、振り返りの時間は①日誌の記入②担当教員の確認、できたことや次時に頑張ることのフィードバック③電子黒板での確認④教師（Ｔ１）の話に簡略化され、時間も１０分程度に短縮された。

9/6(水)	名前	もくひょう	ひょうか	できだか
		・あいずにあわせて、さぎょうをする。 😆ひとり　☺せんせいといっしょ　☹やらない	☺	100
		・ひとりでじゅんび・かたづけをする。 😆ひとり　☺せんせいといっしょ　☹やらない	😢	120
		・じかんないにじゅんび・かたづけをする。 😆ひとり　☺せんせいといっしょ　☹やらない	☺	100
		・ひとりでぶるたぶとりをする。 😆ひとり　☺せんせいといっしょ　☹やらない	😄	80

図７　プルタブ取り工程評価シート（改善後）

また作業日誌においても書字に時間がかかってしまうことから、様式を簡略化（図８）し、目標の確認や振り返りの時間を十分に確保できるよう改善した。

図８　日誌様式

②成果

本研究における成果は振り返りの時間を丁寧に生徒にとって分かりやすいものになるよう教師が常に工夫・改善を重ねたことで、Ｐ（目標の確認）Ｄ（生徒たちの取り組みやそれに対する教師の称賛や評価）Ｃ（振り返りの時間）Ａ（次時に頑張ること、評価を基にした目標の確認）サイクルを生徒の実態に合わせて整えることができ、作業への取り組みが意欲的になった生徒が増えてきたことである。

特に生徒との対話を通した振り返り（Ｃ）では、できたこと（態度面や技術面）に加え、上手くいかなかった点を今後どのように改善すべきかについて自ら考えて教師に伝える様子も見られるようになってきた。また発語が難しい生徒においても視覚支援を頼りにしながらも目標に対する評価を指さしで教師に伝えたり次時に行いたい作業内容をジェスチャーで教師に伝えたりする様子が見られるようになった。これらの様子から作業学習への意欲や期待感の高まりが見られている。

また、これまでは本時の学習での振り返りが次時の行動につながらない生徒がほとんどであったが、実践を続けていく中で、始まりの会での日誌記入において、教師との対話から前時の振り返りを思い出し、本時において自分が意識して行動すべき点や目標とする出来高を考え、実践に生かそうとする生徒も見られるようになってきた。ＰＤＣＡサイクルの流れが一部の生徒たちに浸透しつつある。

今後も幅広い生徒たちの実態に合わせ、ＰＤＣＡサイクルを基に、作業学習に対する意欲や充実感、達成感などを育んでいけるような授業の在り方を検討し改善につなげていきたい。

４　成果と課題

本研究では、作業学習における各教科の基本的な知識・技能を確実に習得させるための個に応じた効果的な指導と評価の在り方をテーマに、評価シートを活用した授業実践と改善に取り組み、指導と評価の一体化を図ることができた。

生徒の実態に合わせた評価シートを作成したことにより、生徒たちは「授業において何がでできるようになったか」や「次時に頑張るべきこと」を自ら考え主体的に評価できるようになった。また

自己のできるようになったことを実感し、学習に対する意欲を高めることができた。教師は生徒たちの正確な評価を支えるために、学習の「めあて」を個に応じて分かりやすく提示することや、「めあて」に向かって自分なりに取り組む姿を具体的に評価したり称賛したりする指導態度が浸透した。

振り返りシートの評価や生徒たちの取り組みを基に、指導や支援方法を複数の教員で検討し、実践することで授業改善につながっていった。振り返りシートの評価は、個別の教育支援計画の評価や要録の記録、年間指導計画や授業計画等の改善へ生かすことができた。また、一人一人の教師がそれらの流れを実践したことにより、生徒の学習評価を多面的に捉えることは、教師の指導方法や教材教具の改善、指導計画の改善にまでつながる重要な事項であることを実感することができた。

以上の成果があった一方で、始めの会と終わりの会に記入する作業日誌の検討がされていないことが課題として挙げられる。 今後は個に応じた作業日誌の形式を整えることや振り返りシートに反映しやすい作業日誌の内容の検討を進め、中学部教員全員で振り返りの時間の充実や授業改善に取り組んでいきたい。

５　参考文献

・特別支援学校教育要領・学習指導要領解説　総則編（幼稚部・小学部・中学部）平成３０年　３月
・特別支援学校学習指導要領解説　各教科等編（小学部・中学部）平成３０年３月
・新学習指導要領を踏まえた「学習評価」の工夫　育成を目指す資質・能力の３つの柱を３観点で見取るアイディア　武富　博文　増田　謙太郎

Ⅳ　高等部

「社会的・職業的自立に向けて、課題を解決する力の育成につながる、個に応じた学習の振り返りの仕方や評価方法についての検討」

１　研究の目的（趣旨）

より良い家庭生活や将来の職業生活の実現に向けて、生徒一人一人が生活を工夫し考えようとする力を付け、課題を解決する力を育成していきたい。そのために、生徒自身が進んで学習に取り組み振り返りや評価ができるようにしたい。昨年度までの学校課題研究を通して、新学習指導要領に基づいた年間指導計画、単元指導計画の作成と授業改善をする中で、生徒に分かりやすく実態に合わせた目標やめあてを設定し、内容などを検討していくことが大切だと感じた。作成した年間指導計画や単元指導計画を活用し、授業を実践するときに、自分の良いところやできることなどを伸ばし、課題に気付き解決する力を身に付けるために、目標やめあての提示と共に生徒が自分から行える学習の振り返り方法や学習に対する達成度の評価ができるように改善し、より良いものにしていきたい。

２　研究計画

（１）昨年までに作成した年間指導計画に基づき、内容を適切に実施しながら、社会に出た際に求められる社会的・職業的自立に必要な資質・能力を育成する指導の在り方を考え、計画の見直し、授業改善を継続的に行う。

（２）作業学習に焦点を当て、課題を解決する力の育成を目指す。作業学習の授業の終わりに行う反省会の持ち方や、作業学習で使用する日誌の活用方法などを中心に実践を行い、個に応じた学習の振り返りの仕方や評価方法について各作業班で検討する。また、他の作業班の教員と情報交換する場を設け高等部全体で実践していく。

３　実践

令和４年度

ア　研究方法

・新学習指導要領に基づいて、年間指導計画、単元指導計画の見直しと授業改善を行う。

・各作業班で、反省会、作業日誌の活用について検討して、話し合った内容を教員間で共有する。

<table>
<tr><td rowspan="2"></td><td colspan="2">主な研修内容</td></tr>
<tr><td>①　年計・単元指導計画作成</td><td>②　反省会のもち方・日誌の活用の仕方</td></tr>
<tr><td>５／１０</td><td colspan="2">高等部研究計画の確認</td></tr>
<tr><td>６／１４</td><td rowspan="5">研究日を中心に必要に応じて各グループで年計、単元指導計画の見直し作成を行う。</td><td rowspan="4">反省会のもち方について
日誌の活用について
反省会の実施状況について
日誌の活用の状況について</td></tr>
<tr><td>７／　５</td></tr>
<tr><td>１０／２４</td></tr>
<tr><td>１２／　６</td></tr>
<tr><td>１／１０</td><td>まとめ</td></tr>
<tr><td>３／１０</td><td colspan="2">令和４年度研究報告会</td></tr>
</table>

イ　学校課題研修日　記録

６月１４日

清掃班	現状 ・反省点、改善点について発表する。 ・終了時間に応じて、１人～３人が発表する。発表する生徒が偏らないように配慮する。 今後 ・清掃グループ毎の反省共有やICTの活用など検討していく。
木工班	現状 ・反省点、その日良かったことやアドバイスされたことなどについて発表する。 ・終了時間に応じて、１人～３人が発表する。発表する生徒が偏らないように配慮する。 今後 ・木工グループ毎の反省共有やICTの活用など検討していく。
農芸班	現状 ・日誌記入後、反省点や難しかったこと、改善点を発表する。 ・終了時間に応じて、１人～３人が発表する。発表する生徒が偏らないように配慮する。 今後 ・その日の作業内容によってグループを分け、反省会の際にグループごとに生徒が主体的に振り返りを行えるようにしていきたい。（グループは固定ではなく、作業内容によって編成を変える）グループで出た反省を最後、全体で共有していく。 ・ICTの活用
園芸班	現状 ・日誌に書いてあること（目標に対する評価、頑張ったこと、注意を受けたこと、次回頑張ること）を発表する形式であった。 今後 ・目標に対しての評価をタブレットで視覚的に示しながら振り返えるようにする。また、◎、○、△の色分けや、グラフ表示をして分かりやすくする。これをもとに、始まりの会で目標と前回の評価を確認して、その日の目標に対して生徒に意欲をもたせられるようにする。 ・個々の発表を共有できるように発表者の発表に耳を傾け、お互いに認め合えるようにする。実態に応じて、色のマッチングやタブレットの活用等の発表方法を検討する。
受注班	現状 ・基本的には全員の生徒が一人ずつ前へ出て、頑張ったことなどを発表している。 今後 ・教師が進めるのではなく、班長が中心となって今までの進め方で反省会を行っていく。
紙工班	現状 ・２班に分かれて反省会を行っている。 ・１班は、教師が反省会を進行。生徒一人一人に質問形式で反省や評価など振り返りを行っている。 ・２班は、班長が反省会を進行。ICTを活用し、生徒の反省（良かったこと、頑張ったことなど）を教師がタブレットに入力し、スクリーンに映し出す。反省を受けて次の目標にしている。 今後 ・生徒の実態に合わせて自己評価や目標達成度を視覚的に分かりやすくする。（文字で表記する。△○◎等の評価を使うなど） ・△○◎の評価を行い、学期ごとに総合評価を出して、次の学期に目標につなげる。（できたところはステップアップ、難しかった所はステップバック、スモールステップ）

７月５日

清掃班	現状 ・始めに目標と作業内容を記入する。 ・反省会前に態度面、作業面等について◎○△で自己評価し、反省点等を記述する。 今後 ・反省点や教師からの助言を日誌に記録するよう促す。 ・反省会の際に、次回の目標を立てる（考える）時間をとり、日誌に記入する。
木工班	現状 ・始めに各自、目標と作業内容を記入する。 ・反省会前に態度面、作業面等について◎○△で自己評価し、反省点等を記述する。 今後 ・反省点や教師からの助言を日誌に記録するよう促す。 ・反省会の際に、次回の目標や予定を確認する。

農芸班	現状 ・各自日誌記入後、グループごとに分かれグループの反省会を行い、まとめを代表者に発表させる。それに対して教師がコメントをする。 今後 ・グループ反省では、自分の反省を各自が発表することにとどまり、グループとしてのレベルアップにはつながっていない。 ・協力して作業に取り組めていたかどうかの反省ができるようにしていきたい。
園芸班	現状 ・具体的に考えるように指導を継続したところ、目標や出来高など自分で考える生徒が増え、反省についても自分で振り返り文章で表現できるようになってきている。(A グループ) ・文章を書けない生徒に対して、マーカーで作業内容や目標、反省などを書いたり、文字を書いたシールを貼ったりしている。(B グループ) 今後 ・評価項目の態度、知識、技能の部分を１項目ずつの評価にする。 ・文章等を書けない生徒に対しては、作業内容、実習の目標、評価を、表示しておいて選べるようにする。 ・◎、○、△を理解していない生徒については、シールやはんこなどを活用する。 ・実態に応じて、日誌をタブレット入力化し、文字入力形式にしたり、図・絵等の選択形式にしたりする。タブレット入力したものをチームスで共有できるようにしたい。
受注班	現状 ・自分で考えて記入できる生徒にとってはいいが、それが難しい生徒は教員が生徒の様子から見合った言葉を書き視写やなぞりで写すことになる。 今後 ・筆記が難しい生徒に対して、絵やイラストに〇をつけたり評価項目を減らしたりする。 ・目標は表紙等に貼り、その目標の自己評価、出来高、仕事内容を書き、教師の支援を減らす。
紙工班	現状 ・基本的な書式を使用している。 ・自己評価と教員評価があって良い。 ・生徒の実態によっては、日誌に時間がかかり過ぎてしまったり、難しかったりする。 今後 ・生徒が自己評価をする際、自己肯定感が低かったり、自分を過大評価してしまったり、生徒によって様々なので、教員が評価を付ける際に、自己評価と教員評価すりあわせ（なぜ評価が違うのか伝える）をする必要がある。そうすることで、的確に自己評価できるようになるのではないか。的確に自己評価できると、生徒自身が次の目標を立てやすくなるのではないか。

１０月２４日

清掃班	・個人と作業グループとしての反省の機会を設定し、反省会で発表を行った。反省や次回の目標を全体共有することができ、学びあう姿勢や自ら目標を考えたりする様子が見られた。意見表出が難しい生徒については、教師が介入し支援する必要がある。
木工班	・教師が毎回、生徒が振り返ることができるようにアドバイスをしたため、日誌の反省、振り返りを記述する所が詳しく書けるようになった生徒が増えた。 ・教師からも、毎回、その日良かったことなど言葉を掛けて日誌を返している。
農芸班	現状 ・各自日誌記入後、グループごとに分かれグループの反省会を行い、まとめを代表者一人一人が発表する。それに対して教師がコメントをする。 今後 ・グループ反省では、自分の反省を各自が発表することにとどまり、グループとしてのレベルアップにはつながっていない。 ・グループの共通目標を開始前にたて、共通理解を図ってから作業を行う。
園芸班	・時間の制約があるため全員の発表は行わず、評価と頑張ったこと、助言を受けたことを発表している。 〇目標の設定の仕方について ・B：現在は、個別にその都度目標を設定している。２か月に一回の目標を設定すべき。 ・A：個別に目標を設定している。前回の反省をもとに目標を設定し、意識して活動している。 ・今後は、AB 共通で園芸班全体の目標（職場のルール）を確認していく。
受注班	・両教室とも、班長が反省会を進行している。その日の評価を生徒自身が ICT を活用して入力している。評価によって色分けをし、実態によって分かりやすく工夫している。 このように視覚支援をすることによって自分で振り返りができたり、評価を全員で共有したりすることができる。

紙工班	・両班で、班長が反省会を進行している。ICT を活用し、生徒が反省（良かったこと、頑張ったことなど）を発表しているときに、その場でタブレットに入力し、スクリーンに映し出すようにした。反省を受けて次の目標にしている。 ・△○◎の評価を色分けして使視覚的に分かりやすくなった。自己肯定感を高めることができた。 ・今後実施予定・・・△○◎の評価を学期ごとに総合評価して、次の学期に目標につなげる。（できたところはステップアップ、難しかった所はステップバック、スモールステップ）

１２月６日

清掃班	・生徒の実態に応じた様式を活用したことで、文章を書くことが苦手な生徒なども、スムーズに振り返りを行うことができた。 ・良くできた点や反省点、改善点に加え、教師からの助言などを記載するようしたことで、反省や次回の目標設定がスムーズになった。
木工班	・教師が、生徒が活動を返ることができるようにアドバイスをし続けたことにより、日誌の反省、振り返りの記述する所が、詳しく書けるようになった生徒が増えた。 ・教師からも、毎回、一人一人その日良かったことなど、記入してさらに言葉で伝えている。その言葉を覚えていて、次の目標や反省に生かしている。
農芸班	・個人反省の場合は、全員が①今日の目標とその評価　②その他の評価で◎や△の項目の発表　③反省を発表する。それに対して教師がコメントをして、そのコメントを記入させる。 ・今後は教師のコメントを聞き取り、生徒が記入する。記入することで、理解度を確認できるので、有効な手立てだと考えられる。
園芸班	・評価項目の態度、知識、技能の部分２項目ずつを１項目にしたことにより、生徒自身が評価しやすくなり、また、時間短縮になった。 ・文章等を書けない生徒に対しては、作業内容、目標は、評価を選択することで生徒自身が評価することができた。 ・◎、○、△を理解していない生徒については、タブレットを活用し評価表の色分けをすることによって生徒への意欲向上につながった。
受注班	・日誌をイラスト化したことは文字が書けない、書くのが難しい生徒にとっては有効であった。また日誌で時間がかかっていた分、作業時間の確保にもつながった。 ・教員の負担が減った。（一人しか見られなかった場面でも二人、三人と見ることができた。）
紙工班	・教員が評価を付ける際に、自己評価と教員評価のすりあわせ（なぜ評価が違うのか伝える）を継続して行ったことと、反省会で△○◎の評価を色分けして視覚的に分かりやすくしたことで、的確に自己評価できるようになり、生徒自身が次の目標を立てることができるようになってきた。

１月１０日

清掃班	・反省会のもち方については、個人での反省の他に、班（グループ）としての反省をする時間を設けたことで、課題を生徒同士が共有し、生徒が主体となって解決する意識、態度を身に付けることができた。授業の残り時間にもよるが、反省会の時間を可能な限り確保し、振り返りや反省の共有ができると、次時への意欲につながると思う。 ・日誌については、実態に応じた様式を活用したことで、文章を書くことに苦手意識をもっている生徒もスムーズに振り返りの学習に取り組むことができていた。また、作業の記録や教師、外部講師からの助言などを記録することで、作業の振り返りや次回への目標設定などがしやすくなった。
木工班	・反省会のもち方については、生徒主体で個人での反省をする。反省会の時間を可能な限り確保し、振り返りや反省の共有ができると、次時への意欲につながると思う。 ・教師からも、毎回、一人一人にその日良かったことなどを、記入してさらに言葉で伝えている。生徒はその言葉を覚えていて、次の目標や反省に生かしている。
農芸班	・作業開始前にグループの共通目標をたて、目標達成のための具体策を考える。 ・各自日誌記入後、グループごとに分かれグループの反省会を行い、まとめを代表者が発表する。 ・教師のコメントを聞き取り記入することは、理解度を確認できるので有効である。グループ共通の目標を達成するために具体的に何をすべきかの手立てを考えるのが難しい。目標に対する反省はできるようになってきたので、今後は作業中に手立て等を相談しながら作業を進めていけると良い。
園芸班	・日誌を見直したことで、反省会の時間を確保できるようになった。また、反省会をもとに次回の目標や評価をどのようにしたいかを個別に確認できるようになった。
受注班	・始めの会と反省会は班長が進行するようになり、主体的に取り組み意欲につながり始めている。 ・反省会では、ＩＣＴを活用し、評価を色分けするなど視覚的に分かりやすくすることができた。 ・生徒の実態に合わせて日誌の記入方法を見直したことで、反省会の時間や生徒との振り返りの時間を確保できるようになった。

紙工班	・始めの会と反省会は生徒が進行するようになり、班長は主体的に取り組む意欲につながった。 ・反省会では、ＩＣＴを活用し、評価を色分けするなど使視覚的に分かりやすくすることができた。また、評価を学期ごとに総合評価して、自己肯定感を高めたり、次の学期に目標につなげたりすることができた。 ・日誌の記入については、教員が評価を付ける際に、自己評価と教員評価のすりあわせを継続して行ったことと、反省会での評価を色分けして視覚的に分かりやすく表示したことで、前回の作業と比較して、的確に自己評価できるようになってきた。また、生徒自身で次の目標を立てることができるようになってきた。

ウ　令和４年度の成果と課題

・Ｒ３年度からの継続で、Ｒ５年度に向けて新学習指導要領に基づく新書式で年間指導計画、単元指導計画の作成（内容の見直し、学年間の系統性）を行い、完了した。今後は、実践し反省を生かして授業改善などに取り組んでいく。

・日誌については、メモを取ったり、自分で考えて行動したりすることを念頭に反省は日誌の記入を行ったことで、自身の反省を生かして次回の目標を立てることが定着してきた。しかし、メモの取り方や内容については不十分であり、教科学習でもメモについて取り組むなど継続した学習方法の検討が必要である。

・グループごとで目標を立てたり反省を行ったりすることで、周囲を意識して活動することへの芽生えが見られた。今後は立てた目標を達成するための具体的な手立てや作業中に言葉を掛け合いながら作業を進められるように、指導方法を検討する必要がある。

・課程ＩはICTの活用があまり見られない。簡単に入力できて、生徒自身が成果や課題を考えたり振り返ったりできるようなツールの検討を行いたい。

・始めの会や反省会などを生徒が進行するようにしたことで、班長の主体的に取り組む意欲につながった。今後は全ての生徒が主体的に取り組めるように発言する機会を設けるなどの工夫をしていきたい。

・反省会での評価は、ＩＣＴを活用することで視覚的に分かりやすくすることができた。今後は、作業班としての評価や学期ごとの総合評価などを行うことで、作業班全体の作業意欲の向上を図る。

・日誌を見直したことで、反省会の時間や振り返りの時間を確保できるようになった。日誌の記入の際、的確な自己評価ができ、生徒自身が評価や反省を生かして次の目標を立てられるように指導方法の工夫をしていく。

令和５年度

ア　研究方法

・各作業班で、個別の指導計画と作業の実態を確認しながら、個々の生徒の実態・目標・課題について共有して、実態表の作成と活用を行う。

・改訂した作業日誌を再確認した上で、実際の指導場面で、教師が個々の目標・課題に基づいた指導を行い、教師の意識の変化と生徒の変容を共有する。

５／１８（木）	生徒について、作業班の教員全員で個々の生徒が作業で今目指していること（技能面・態度面）をまとめて、目標と課題を共有し、作業の際、教員側の指導や言葉掛け、コメントの記入に活用する。
６／１５（木）	生徒の目標と教員側の意識について共通理解及び実践する。
７／　４（火）	生徒への具体的な支援方法や評価方法について検討し、実践する。
９／　５（火）	教員側の意識の変化についての意見を出し合い、まとめたことを発表する。

10／１２（木）	生徒の変容について１事例を取り上げてまとめる。
11／　９（木）	各作業班で成果、課題のまとめを行い、発表・共有する。

イ　学校課題研修の記録

（１）生徒の目標と課題シートの作成（例）

		学年	名前	達成したい課題・目標	
				態度面	技術面
4	1	1年		返事、報告などをはっきり行う	いろいろな作業を覚えて正確に行う
5	2	1年		人によって態度を変えずに取り組む	ていねいに作業を続ける
6	3	1年		返事、報告のやり方を覚える	指示された作業ができるようになるまで頑張る
7	4	1年		自分から返事、報告、受け答えをする。	正確に作業を続ける
8	5	1年		落ち着いて作業に参加する	教師と一緒にできることを増やす。
9	6	2年		一日作業を続ける。	できるようになった作業を正確に行う
10	7	2年		活動内容や役割りが分かり落ち着いて取り組む	いろいろな作業を覚えて正確に行う
11	8	2年		安定した気持ちで取り組む	道具や材料を丁寧に扱う

清掃班　木工班　農芸班　紙工班　受注班　園芸班

ウ　教師側の意識の変化

・教員の中で、生徒の課題を改めて共有することができた。
・課題を視覚化することで、一人一人の生徒に対する具体的な支援を検討しやすくなった。
・生徒の実態把握が速やかに行えた。
・他学年、他学級の生徒に対する関わり方や支援方法を考えたり、教員間で共有したりすることができた。また、効果のあった支援方法を共有できた。
・生徒の課題と目標を視覚的に確認することで、担当グループ以外の生徒にも言葉掛けができた。
・一対一対応ではなく、教員全体で一人一人に支援、指導を行うようになった。
・生徒個々の課題と目標を確認することで、担当する生徒が変わっても指導、支援ができた。
・教員間で、指導や支援の方法を検討する幅が広がった。

エ　生徒の変容（各班１事例）

園芸班

生徒名（イニシャル）	S・K
課題・目標	・目標をもって積極的に作業に取り組むことができる。 ・作業内容を覚え、友達と協力して作業に取り組むことができる。
実態を受けた教師の支援	・教員間で情報共有する。 ・教員一人一人の個性を生かし、様々な角度からの言葉掛けや支援、活動を提案する。
生徒の変容	【年度初め～６月】 ・校内実習中に作業着を忘れて作業意欲をなくしたが、班の教員数名に、教室の前でできる作業を促されると取り組むことができた。

	・生活習慣の乱れから作業途中に居眠りが見られた。教員から注意を受けても居眠りを続ける。さらに指摘をされると不機嫌になり、教員の話を聞き入れることができなくなった。 【９～１０月】 ・２回目の校内実習前には「身支度を忘れない」の目標を立てて取り組むことができた。 ・様々な角度から教員が言葉掛けを行うことで、注意も聞き入れられるようになってきた。 ・作業途中に居眠りをしてしまうことはあるが、「顔を洗ってもいいですか。」と教員に伝えて気分転換をする様子が見られた。 ・様々な作業に意欲的に取り組み、友達と協力して作業に取り組む様子も見られた。
生徒の主体性につながる具体的な指導	・責任のある仕事や、大事な仕事を任せることで、積極的に作業に取り組めるようにしていく。 ・教員の言葉掛けを必要最低限にして、本生徒が自ら考えて活動できるようにする。 ・できた時には全体の前で称賛し、意欲につなげる。

受注班

生徒名（イニシャル）	S・R
課題・目標	・発語に不明瞭なところがあるので、はっきりと報告する。 ・せっかちな性格であり、４月にクリップにシールを貼る作業を始めた当初は、斜めに貼ってしまうことが多かったので、丁寧にシールを貼る。
実態を受けた教師の支援	・作業の内容（シールの貼り方、出来高）のほか、課題である報告時の発音や言葉遣い、本人の長所である報告の際の視線や態度をその都度大いに称賛し、本人の意欲を引き出す。
生徒の変容	・１学期に目標を設定した際に比べて、大きな声で報告できるようになってきた。 ・報告の態度に対し教師からの称賛を受けることで素直に喜びを感じ、意欲の向上に繋がった。 ・シール貼りの作業のほか、２学期から他の生徒が行っているハンガー組み立ての作業の練習を始め、組み立て作業もできるようになり、作業学習に対する自信がついてきた。 ・１学期は作業中に材料（ハンガーの部品）が少なくなってきたことに他の生徒が気付き、材料を補充しに行くことに気付くと、本人も慌てて手伝いに行こうとする様子がみられた。次第に周りの様子を落ち着いて見渡すことができるようになり、材料が少なくなってきたことに自ら気付き、慌てることなく率先して補充しに行くことができるようになった。
生徒の主体性につながる具体的な指導	・本人の素直な性格を活かし、良いところは本人に伝わりやすいよう称賛する。 ・率先して材料の補充できるようになったことを、本人や他の生徒にも伝わるように称賛し、意欲の向上と、主体的な活動に繋げて良くとともに、他の生徒の意識付けを図る。

紙工班

生徒名（イニシャル）	I・A
課題・目標	・返事、報告などをはっきり行う。 ・いろいろな作業を覚えて正確に行う。
実態を受けた教師の支援	・具体的な言葉や、作業内容を、練習や手本などで伝える。 ・理解状況の確認の必要性を教師間で共通理解して支援を行う。
生徒の変容	・分からないときや困ったときに、教師に伝えたり質問したりできるようになってきた。 ・紙漉き、飾り作り、紙パルプ作りなどの作業を覚えることができた。

	・教師への報告や、班の友達への言葉掛けの際、大きな声で行えるようになってきた。 ・大きな声で話そうとしていることが増えた。 ・周囲の様子を見て、関わろうとしたり手助けをしたりしようとしている。 ・準備や片付けを自分から率先して行うことは難しい。 ・自分が苦手なことに挑戦する様子は見られない。
生徒の主体性につながる具体的な指導	・慣れた工程の作業では、材料や用具の不足などがあっても、本人が気付いて教師に報告や質問をするまで待つなど、自分で考えて行動する場面を設ける。 ・確実にできるようになった作業については、やり方を言葉で説明したり、友達に教えたりする機会を設ける。 ・自信をもてるような言葉掛けを行う。また、成功体験を積めるようにする。 ・いろいろな作業工程を行い、失敗や困ったことを経験する。 ・生徒同士のつながりをもたせることで、コミュニケーションの力がつくのではないか。 ・リーダー的な立場を任せることで、人の前に立って話す経験を積めるようにする。 ・自分の気持ちや考えを伝える力を養うことができるように、発表などの機会を増やす。

木工班

生徒名（イニシャル）	S・Y
課題・目標	（課題）使用する機械（特に糸のこぎり）に対して過度な恐怖を感じる場面が見られる。また、それにより作業の選り好みをする様子が見られる。気分が乗らないと、活動を続けることが難しいときもある。 （目標）・道具の正しい使い方を理解し、安全面に配慮しながら作業する。
実態を受けた教師の支援	・道具の使い方の手順表を示し、使い方の見通しをもてるようにする。 ・T1、T2 ともに生徒の気持ちの状態を確認し、情報を共有する。 ・教員の手本や、班員の生徒が機械を使っている様子を見学するように促し、使い方のイメージがもてるようにする。 ・本人の気持ちのもちようによって、やりたい作業の内容が変わることがあった。本人が糸のこぎりを使いたいと申し出があった場合は、本人の意向を尊重して作業を進める。
生徒の変容	・１学期はなかなか糸のこぎりを使わず、やすりがけを中心に作業を行っていた。他の生徒が糸のこぎりの刃を折ってしまう様子を見たことで、恐怖を感じたのではないかと考える。 ・２学期に入り、教師の手本や生徒が機械を安全に扱っている場面を見たことで、本人が安心して糸のこぎりなどを使う場面が増えてきた。使い方などの見通しをもつことができたのだと考えられる。 ・生徒自ら「糸のこぎりを使ってもいいですか？」と教師に相談する場面が見られるようになった。
生徒の主体性につながる具体的な指導	・基本的には教師が作業内容を生徒に割り振っているが、日によっては作業内容の選択肢を本人に与えるようにした。気持ちの波によっては、指示した作業を嫌がる様子が見られたため（糸のこぎりを使用するのが怖い、などの理由）上記に示した支援方法を試しながら生徒の実態、主体性を考慮しながら作業を進めた。 ・上記に書いたことを実践してはいるが、指示された作業内容を行うことも今後の実習や卒業

	後に就労する上で大切になる。今後は作業内容の選択肢ではなく、糸のこぎりの作業を依頼し「曲線切り」ができるか、「直線切り」だけならできるかなどの選択肢を本人に与え、決められた作業の中でどのように動けるとよいかを本人にも考えてもらいながら指導にあたりたい。

農芸班

生徒名（イニシャル）	H・R
課題・目標	・正しい言葉遣いで返事、報告、相談などを行う。 ・相手に聞こえる声の大きさで挨拶、返事を行う。
実態を受けた教師の支援	・不適切な言葉遣いや挨拶、返事が確認された際に、その場で適切なやり方を教える。 ・特定の個人ではなく全体に向けて、言葉遣いや声の大きさ、姿勢等の基本的なビジネスマナーについて話をしたり教師の手本を示したりする。 ・作業能力の向上と同時に、基本的なビジネスマナーの習得を目指すことを担当教師間で共通理解し、指導にあたる。
生徒の変容	【年度初め～６月】 ・上級生や教師に対して、敬語を使用しないなどの不適切な言葉遣いがしばしば見られた。教師から注意されると、反論したり気持ちが落ち込んだりする様子が見られた。 ・特に教師への報告や質問の声が小さく、聞き取られずに複数回やり直すことがあった。 【９～１０月】 ・適切な言葉遣いをする頻度が増えた。不適切な言葉遣いをした際も自分で気付いて言い直したり、教師から注意されても不機嫌にならずに言い直したりすることができるようになった。 ・１学期と比較して、報告や質問の声が徐々に大きくなった。
生徒の主体性につながる具体的な指導	・活動の様子を撮影し、自分の姿勢や声の大きさ言葉遣いなどを客観的に見る時間を設定する。 ・教師は助言やヒントを与えるにとどめ、生徒のみで考える→発言（発表）する機会を設ける。

清掃班

生徒名（イニシャル）	K・A
課題・目標	・指導や助言を素直に受け入れて、適切に対応することができる。 ・挨拶や返事、報告を適切な態度で行うことができる。
実態を受けた教師の支援	・事前に適切な話の聞き方や姿勢、態度などを示す。 ・不適切な言葉遣いや挨拶、返事があった場合は、適宜、適切な方法を確認する。 ・指導や助言の意図が伝わっていない場合は、補足して説明する。 ・必要に応じてロールプレイを行い、適切な受け答えができるよう促す。
生徒の変容	・教師に対して、敬語を使用しない、目線を合わせないなどの不適切な言葉遣いが見られた。教師から注意されると、気持ちが落ち込む様子が見られたが、指導を繰り返したことで、適切な言葉遣いや態度をする頻度が増えてきた。 ・報告や質問の声が小さかったが、徐々に大きくなってきた。 ・教師から注意されても不機嫌になることが減った。
生徒の主体性につながる具体的な指導	・適切な受け答えや態度について、なぜそうするのかを考えさせるよう指導する。 ・就労後の社会生活をイメージさせ、適切な態度について気付けるよう指導する。

オ　令和５年度の成果と課題

【成果】

・作業日誌を改善したことで、実態に合わせて生徒が主体的に目標設定や評価を行った。（園芸班）

・年度当初に所属する生徒の課題と目標を教員間で共有することや、生徒の達成状況、支援と成果について随時話合うことで、支援方法について速やかに共通理解が図れた。（受注班）

・ICT の活用で日課や評価が視覚的に見やすくなり、各自の今回と前回の評価の比較や、班全体の評価をすることができた。（紙工班）

・作業班内で定期的に教員が話し合うことで、状況に合わせて適切に指導方針などを定めることができた。（木工班）

・反省会で、生徒同士のグループでの話し合いを設けたことで、生徒一人ひとりがどのように活動していきたいかなどを考えたり、発言したりする場面が見られるようになった。（木工班）

・作業日誌の形式が改善されたことにより、生徒自身が次につながる反省内容を書きやすくなり、教員も指導しやすくなった。それに伴い、生徒の課題に対して作業班内の教員で共通理解しやすくなった。（農芸班）

・教員間での共通理解を図り、生徒への教育効果が高まった。（清掃班）

【課題】

・通常作業用と実習用の作業日誌に系統性をもたせる。（園芸班）

・効果的だった指導内容を、他の生徒にも応用していく。（受注班）

・日課、分担、きまりなどを視覚的に分かりやすいデータ化して各作業班で共有する。（受注班）

・評価とともに目標も確認できるとよい。（紙工班）

・学習指導要領の観点を参考にして、作業日誌の評価方法を改善する。（木工班）

・作業学習での自分の得意、不得意について生徒本人が考える機会を設ける。就労を見据えて、合理的配慮の内容を考えて伝える学習につなげる。（木工班）

・「報告・連絡・相談」を対生徒同士、学級に対して、別の作業班に対して行うことができるようにする。（農芸班）

・メモ帳の使用など、「職業」等で関連付けて学習を行う。（農芸班）

・選択肢の中から自分で作業を選び、最後まで責任をもって行う機会を設ける。（農芸班）

・現場実習の事前学習等、作業以外の場面でも、生徒が学習内容を生かすことができる。（清掃班）

４　今後に向けて

本研究は、令和３年度より継続している。新学習指導要領に基づく年間指導計画の見直しと作成、各作業班の作業日誌の見直しと改善、目標設定や反省会のもち方についての検討、評価方法の検討を行った。今回の研究では生徒が主体的に取り組み、課題を解決しながら活動することを目標に、作業学習の中で指導計画に基づく指導、目標設定や反省会の実践、作業日誌の活用と検証を行った。

成果として、各作業班とも、教員間での生徒の課題と目標、指導方針の共通理解による指導効果向上が挙げられた。一方、課題として、生徒が主体的に活動や評価に取り組むための目標や評価の提示方法や、習得した技能、態度を作業学習以外の学習へ応用することなどが挙がっている。

今後は、作業学習での取り組みを継続、改善するとともに、これまでの取り組みを生かし、職業的・社会的自立に向けて、各教科、自立活動においても生徒が主体的に取り組むことができる目標、評価方法、環境を設定することで、効果的な指導方法、支援方法を検討していきたい。

V　研究のまとめ

本研究では、各学部で自立活動、各教科等を合わせた指導の中で重点的に取り組む学習を選定し、目標や内容についての検討、児童生徒の学習への取り組みの様子からの評価、という PDCA サイクルに基づく改善を行った。各学部ともに研究をとおして、目標や手立てを明確にして指導にあたることで教員間での共通理解が図られ、個々の目標に応じた指導を行うことができた。また、中学部・高等部では個に応じて評価方法を工夫することで生徒自身が自ら考えて評価をしたり、次の目標を設定したりと学習に意欲的に取り組む様子も見られるようになってきた。

今後はこれまでの取り組みを継続するとともに、これまでの取り組みを生かし、今回設定した学習以外での効果的な指導と評価の在り方を検討していく必要がある。また、卒業後の自立に向けて、学部を超えた事例検討や共通理解を図ることも不可欠である。

編集後記

本研究は、栃木県特別支援学校教育課程研究集会の研究主題と関連させ、令和４年から令和５年の２年間の研究の成果をまとめる形で作成いたしました。この研究の機会をいただけたことで、授業改善や教員の指導力向上につながったことは、本校にとって大きな財産となりました。今後も、今回の研究の成果を十分に生かしながら、児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応した、教育課程の編成及び指導の充実や教員の専門性の向上をさらに図っていきたいと思います。

最後に、多くの方々にこの研究紀要を御高覧いただき、御指導・御助言いただければ幸いです。

学校課題推進委員会一同